

41740

教科書文庫

4
810
41-1943
20000 66275

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

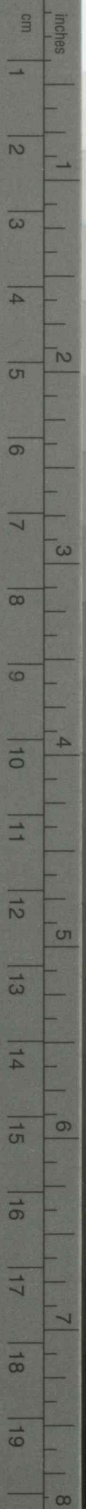


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



4a
810
A21B



中國文教科書

卷五



資 料 室

書 學 海

濟 定 檢 省 部 文

用 科 教 科 文 漢 語 國 校 學 中 日 七 十 月 八 年 八 十 和 昭

之 授 軍
印 藏 兵

吉 田 彌 平 編
石 井 庄 司 補 訂

中 國 文 教 科 書

中 等 學 校 教 科 書 株 式 會 社



42
810
8818

浜 本 純 逸

中國文教科書卷五

目次

一	曉の御寢覺	渡邊幾治郎	一
二	國華	平泉澄	八
三	吉野山	藤岡作太郎	二五
四	残るみ影	本居宜長	一九
五	村上義光	〔太平記〕	三
六	惜春	相馬御風	三〇
七	新緑	五十嵐力	六

八	忘れ難き日	姉崎嘲風	四
九	早蕨		四
一〇	磯	土岐善麿	五
一一	鶯	土井晚翠	五
一二	仁和寺の法師	兼好法師	五
	石清水詣		毛
	鼎かづき		天
一三	長谷部信連	〔平家物語〕	六
一四	五月雨の頃	萩原井泉水	六
一五	雑草	阿部次郎	七
一六	葉書文學	小笠原長生	七

一七	藝苑佳話	〔十訓抄〕	八
	紅葉の錦		八
	鬼の詞		八
	弓張月		九
一八	末ひろがり	〔狂言記〕	九
一九	蜘蛛	豊島與志雄	一〇
二〇	日蓮上人	高山樗牛	一五
二一	故郷の花	〔源平盛衰記〕	一〇
二二	古代希臘人の體育	永井潜	一四
二三	人間の眞價	吉田賢龍	一三
二四	古錢配分の記	福澤諭吉	一三

二五	秋霧……………	〔北畠親房〕	一五〇
二六	月の夜さむ……………	〔新葉和歌集〕	一六〇
二七	當今の憂……………	徳富蘇峯	一五九
二八	一君萬民……………	永田秀次郎	一六六

目次終

中國文教科書卷五

一 曉の御寢覺

渡邊幾治郎

明治天皇に關する多くの御資料を拜見すると、自ら二つの異なる御性格とも見ゆることが拜せられる。それは天皇は如何なる際にも、喜怒哀樂を決して御顔色に現し給はぬといふものと、必ずしも然らずといふものと兩様にわかれることである。前者は軍人に多く、後者は侍從側近者に多い。

白露戦争の時、參謀本部次長として幾度か天顔に咫尺するを得た長岡外史は、よく次の話をしていた。感激してゐた。

渡邊幾治郎

歴史家

前臨時帝室編修官

明治十年(一九一九)

新潟縣生

長岡外史

陸軍中將

帝國飛行協會顧問

周防國(山口縣)生

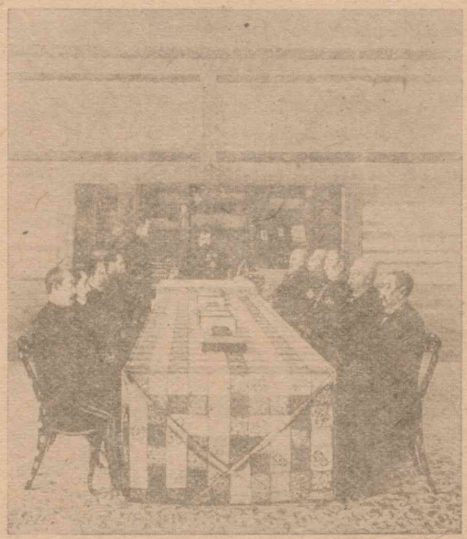
昭和八年卒

年七十六

東郷司令長官
聯合艦隊司令長官
海軍大將東郷
平八郎

マカロフ
露國の海軍提督
明治三十七年旅
順口沖の海戦に
旗艦ベトロバヴ
ロフスが我が軍
の機械水雷に觸
れて爆沈したと
き艦とその運命
を共にした
(西曆一八八一年
四)

明治三十七年五月十四日、東郷司令長官から我が戦艦初瀬、八島、巡洋艦吉野、砲艦宮古の四隻が旅順沖で一時に撃沈されたといふ電報があつた。これより先、露西亞の名提督マカロフ中將が旅順港に入ると共に、三隻の潜航水雷艇が分解されて旅順に送られたといふ電報も來た。當時日本には戦艦總計六隻、その内二隻が一日の中に沈没し、その上巡



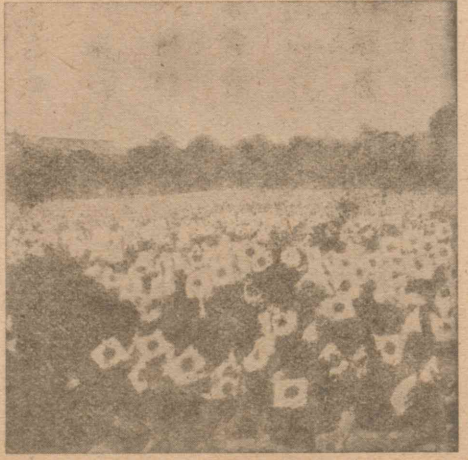
對露宣戰前會議 吉田首相寫

洋艦や砲艦までも撃沈められたのだから、大本營の憂慮は尋常でない、早速御前會議が開かれて、奏上することになつた。

參謀總長

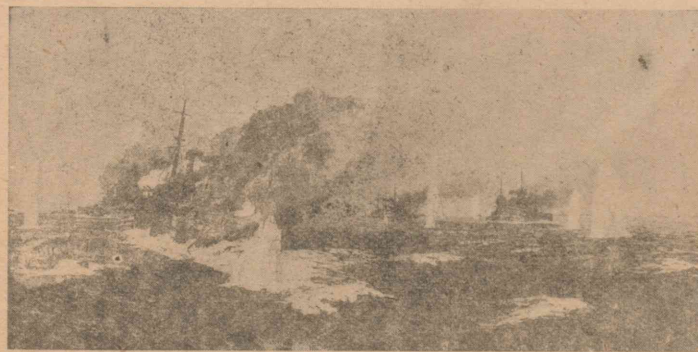
時の參謀總長は
元帥陸軍大將山
縣有朋
軍令部長
時の海軍軍令部
長は海軍大將伊
東祐亨
次長
時の軍令部次長
は海軍中將伊集
院五郎

列席の參謀總長、軍令部長、大臣、元老等何れも悲痛の色は掩ふべくもなかつた。やがて軍令部長及び次長が極めて沈痛の態度でこの凶報を奏上した。一語一句、腸を断たるゝ思で、誰一人として顔を上げ得るものがなかつた。然るに、これを御聽き遊ばされた天皇には、泰然自若として、少しも平生の御様子と御變りがなく、時折「はあ、はあ」と莊重なる御會釋を賜はるのみであつた。そして、奏上が畢ると、いつもの如く悠然と入御あそばされた。總長以下はほつとして、胸中深く磐石の確信が据ゑつけられたのであつた。



國民の歡呼

越えて翌年五月二十八日、日本海海戦の日、大勝利を伏奏するた
めに、同様御前會議が開かれた。これは
振古未曾有の大勝利で、國民は狂喜して
これを祝した。宮城前の廣場には、旗行
列や、提灯行列が行はれ、帝國萬歳の叫び
は、大内山に鳴り響くばかり。大本營會
議はかやうな雰圍氣の眞直中に開かれ
た。控席で葡萄酒が抜かれ、諸員の歡喜
興奮は最高潮に達してゐた。
やがて軍令部長と次長とがこもく御
前に大勝利のさまを伏奏した。長岡中
將は前年五月の會議を回想して、竊に天



日本海海戦 東城鉦太郎

皇の御満悦を推測し奉つて胸を躍らしてゐた。然るに驚くべ
し、天皇の御態度は前の時と全く同様であらせられた。たゞ時
折は「あはあ」といふ御言葉を賜はるのみであつた。參列の諸員
も底知れぬ天皇の御度量に驚嘆し奉る外はなかつた。
長岡中將はかくのごとく、明治天皇が不幸の極度にあらせられ
ても、又歡喜の絶頂にあらせられても、平素と毫末も變らせ給ふ
ことなき御様子、神さながらの御心境にたゞく敬服し奉つて
ゐたのである。

しかし、私は明治天皇の剛毅不動の大御心の深い御奥には、又戰
争に對して憂心忡々、戰況をお案じ遊ばされて夜分御安眠を得
させ給はなかつたことを拜するのである。
女官高倉壽子の談話によると、戰爭中天皇は御寢になつても、ろ

くろく御眠りあそばされない。御注意申し上げてみると、微かに御咳を遊ばすにも、御夜具で御口を覆ひ給うて御聲の漏れないやうに遊ばされる。夜中輾轉反側して御安眠遊ばされなことを拜するので、御側の大宮人たちが、

「昨夜も御寢遊ばされなかつたやうに拜しましたが、と申し上げると、

「いやよく眠つた。」

と必ず仰せられる。眠れなかつたとは未だ曾て仰せられたことがない。しかし實際はさやうではなかつたのである。かやうなことは、當時御側に奉仕した大宮人の一様に語るところである。その御心痛のさまは、

ゆくすゑはいかになるかとあかつきのねざめくくりに世を思

ふかな

どの御製によつて能く拜察される。

かく御心痛が並々ならぬものであつたので、畏くも御平素の供御の御分量が著しく減少し給うたのは御痛ましき限りであつた。かやうな御生活が二箇年續いたのである。思へば洵に長い二箇年であつた。御製に、

さま／＼にも思ひこしふたとせはあまたの年を経しこゝちする

と御漏らし遊ばされたのである。これを長岡中將が拜した神そのまゝの御態度と比較すると、著しき相違を感ずるのである。その何れが、天皇の眞の御姿であらせられるか。

私はこの何れをも眞の御姿であると拜察する。大元帥として、

或は國家統治の天職を擔はせ給ふ天皇としては、もとより長岡中將の申すごとく喜怒色に現さず、磐石の如く泰然たるものがあらせられた。これは剛毅な御氣質が、多年の御修養によつて發揮せられたのである。

しかし、かやうな英雄的と申さうか、神そのものと申さうかの御裡には、國家國民を憂慮せさせ給ひ、一夜として圓かなる御夢を結ばせ給はざる至仁至慈の大御心、或は母后の御病を痛ませ給ひ、御聲を放つて泣かせ給うたといふ人間的御感情を拜するのである。この兩者を矛盾と考へるのは、未だ眞に明治天皇の眞の御姿を拜察し得ざるものである。(明治天皇と明治の建設)

二 國 華

平 泉 澄

母后
孝明天皇の皇后
英照皇太后

平泉澄
國史家
文學博士
東京帝國大學教
授
明治二十八年(三
十五)福井縣生

木花咲耶姫
大山津見神の御
女
天孫瓊杵尊の
御妃



國 華

日本人の最も愛し來つた花は櫻である。古くは單に「木の花」といつて直に櫻の花をさしたことは、木花咲耶姫の御名からも考へられる。尤も支那文化全盛の時には、一時梅や牡丹をもてはやしたこともあり、西洋文明心酔の世には、暫く薔薇やダリヤを賞したことがあつても、それは時代の流行を追ひ、風尙の變遷につれての一时的傾向に過ぎない。結局するところ、櫻の花に對する日本人の愛好は、永久に動かすことが出來ないのである。

本居宣長

國學四大人の一
伊勢國(三重縣)

松阪生

享和元年(1801)

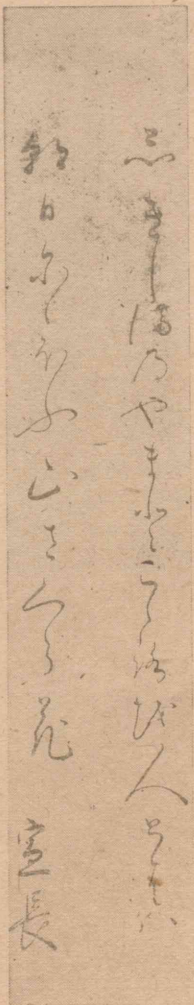
卒

年七十二

贈從三位

思ふに、櫻の花と日本精神との間には極めて微妙な一致點があつて、いはば櫻の花こそは日本精神の象徴ともいふべきものである。本居宣長が、

敷島のやまところを人間はば朝日ににほふ山櫻花



本居宣長集

佐久良東雄

勤王家

國學者

常陸國(茨城縣)

生

萬延元年(1850)

卒

年五十

贈從四位

天保十二年

仁孝天皇の御代

(1841)

と歌つたのは、正にこの間の消息を道破したものである。佐久良東雄といふ人は、元來僧侶であつたが、天保十二年、三十一歳の春、深く感ずる所あり、慨然として還俗し、純粹の日本人たらんとを期して、名を佐久良東雄と改めた。佐久良は櫻である。純

粹の日本精神に立ちかへる時、人は櫻の花を聯想せずにはゐられないのである。姓にさへ附ける程であるから、東雄には櫻の花を詠じた歌が澤山ある。

天つ神いかなる神のこゝろよりさくらはなは咲かせそめ
けむ

朝日かけ豊榮のぼるみよになりて櫻のはなを咲かせてしが
な

などと歌つてゐるが、殊に勝れてゐるのは、
事しあらばわが大君のおほみため人もかくこそ散るべかり
けれ

といふ一首である。これは櫻の花の散りぎはのいさぎよきを見て、感歎に堪へず、一旦緩急あらば、天皇の御爲には我等も亦こ

野矢常方

國學者

會津藩士

明治元年(三三)

歿

年六十七

櫻井

攝津國(大阪府)

三島郡島本村櫻

井

ケーベル

獨逸の哲學者・

音樂家

東京帝國大學文

科大學教師

横濱で歿した

(西曆一八四一—一八

三)

のやうに潔く散つてゆかなければならないと痛感して詠じた
ものであらう。

こゝまで來ると、櫻の花と日本精神との關係は一段と深刻切實
になつてくる。櫻の花を見て、たゞその美はしさに恍惚となつ
てゐるのではない、時節到來してさあつと風に散りゆくその散
りぎはの潔さを喜ぶのである。野矢常方が

我が子には散れと教へておのれまづあらしに向ふ櫻井のさ
と

と歌つたのも、この精神である。こゝまでくると、櫻の花は日本
精神の殊に深刻切實なるもの、即ち武士道と相通するに至る。

哲人ケーベルは

櫻の花の頃こそ日本人を觀察すべき時である。これその牧

小泉八雲

もと英國人でラ

フカチオハーン

といつた詩人

東京帝國大學文

科大學講師

明治三十七年(二

五)卒

年五十五

贈從四位

(西曆一八五二—一八

七)

歌的・哀歌的なる天性の最も明らかに現れる季節だからであ
る。絹の如く柔かなる、華奢なる、澹泊なる、短命なる櫻花こそ、
實にその象徴である。日本人はこの美しき花の、束の間に萎
み、さうして散りゆくその中に、わが生の無常迅速なる譬喩を
見、我が美と青春とのはかなきを見るのである。櫻の花を眺
めてゐる時、春のたゞ中に、秋の氣分が彼の胸に忍び入る。

といつた。さすがは小泉八雲等と相並んで、最も深く日本を愛
し、最も善く日本を理解した人だけあつて、實に見事に櫻の花に
對する日本人の感情をとらへたものといはなければならぬ。

然り、たしかに日本人は、櫻の花を見て、その忽ちにして散るを思
ふのである。その風に散る散りぎはの美しさを思ふのである。
そして人も亦かくの如く美しく咲いて美しく散りゆくことを

希望するのである。美しく咲くことの心にまかせぬとしても、
せめては美しく散ることを冀ふ
のである。 どうせ散る命ではな
いか。 惜しんでも百年の壽命は
保たれないとすれば、惜しむとこ
ろなく花と散らう。

こゝに櫻の花を愛づる心は直に
勇往敢爲、死して悔ゆるところな
き武士の精神につながる。「花は
櫻木、人は武士」とは、古くから世に
いひはやされた諺であるが、花に
四季の草木、色とりどりの趣はあつても、結局櫻の花を第一とす



花 櫻

る日本人は、この花をめづる心の一脈直につながる。武士
といふものを日本人の特性の最も鮮かに發揮せられたるもの
として、これを誇つたのである。 それゆゑ櫻の花を國華とする
ならば、武士道はやがて日本精神の精髓だといはなければなら
ないのである。(日本精神勝座)

三 吉野山

藤岡作太郎

景色よき地には歴史上のゆかしさなく、歴史上にゆかしき地に
は景色に風情なきものの世には多かるに、景色と歴史とを兼備
へたる、これ吉野が天下無雙の名區たる所以なるべし。抑、大和
は人皇以來最も古く開けし國なれば、随つてこの地も山間の僻
地ながら、よく世に知られけらし。南和及び紀伊は木材に富み

藤岡作太郎
國文學者
文學博士
東京帝國大學文
科大學助教授
加賀國(石川縣)
金澤生
明治四十三年(二
月)卒
年四十一

飛鳥淨御原の帝
天武天皇

役行者
名は小角
文武天皇頃の人
聖寶僧正
延喜九年(五九)
寂
年七十八

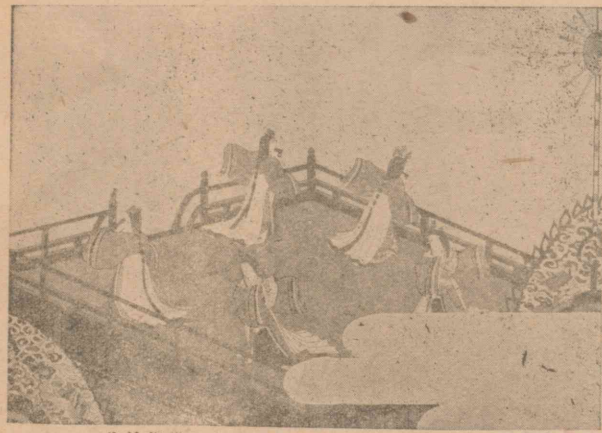
たる處それを都に運ぶには、先づこの地に集めけん。年々に大宮に参りて毛の荒物、毛の和物を貢ぎける國栖といふ山人も、このあたりにや住みけん。その昔、飛鳥淨御原の帝、この宮におはして、日暮琴を弾じ給ひしに、前岫忽ち一抹の雲起り、神女天降りて、袖をひるがへし歌ひ舞ひて大御心を慰め奉りきといふ五節の舞の起原は、袖振山にその名を留めたり。葛城の神を役して大峯を開きたりといふ役行者は、熊野よりわけ入り、醍醐寺の開祖たる聖寶僧正は、こゝより大峯にわけ入りしなるべし。爾來大



山 野 吉

源廷尉
檢非違使尉源義經
兄
弟
佐藤經信
佐藤忠信

峯を奥院とし、吉野を本院として、參詣する者跡を絶たず、金峯山寺の山僧は南都北嶺と肩を比べぬ。



卷繪祭嘗大皇天上今 舞の節五

に見ざるところ、後の世にもまた有りなや。

源廷尉が昨日に變る今日の恨、屋島に寵臣の兄を失ひしは、痛ましけれど勝利に誇りし時なり、今その弟を失ふ失意落膽の時、英雄の涙そも如何なりけん。その後數世、建武中興の政亂れて、吉野朝五十七年、かゝる山中を都と定め給ひけるよ。花咲き花散る時、聖帝の思、月盈ち月虧くる時、百官の涙、かゝるあはれは古

後醍醐天皇の御製に、

みやこだに寂しかりしを雲はれぬ吉野のおくのさみだれの
ころ

村上義光は大塔宮に代りて骨を櫻の陰に埋め、楠木正行は君に
名残を惜しみて雲の中より出づ。草木無情、春に榮ゆることそ
の後幾度ぞ。運命の寵兒豊太閤は、將兵妻子を率ゐて此處に豪
遊し、盃を舉げて花に對し氣を吐くこと千丈、古の英雄が失敗の
迹をや笑ひけん。
大僧正行尊は「花より外に知る人もなし」と知己の得難きを恨み、
西行法師は「やがて出てじと思ふ身を」といひて、妄語の誹をや得
けん。獨り天下の名所を探る蕉翁が風流、母に侍して一生の望
足れりとする山陽が孝行。その名所を記すこと質にして要を

君
後村上天皇

行尊

天台座主
長承四年(一九七)

寂
年七十九

花より外に

もろともには
れと思へ山櫻花
より外に知る人
もなし(金葉集)
やがて出でじ
吉野山やがて出
でじと思ふ身を
花散りなばと人
や待つらむ
(新古今集)

益軒が筆

貞室
本居宣長の説

鈴の屋
巡覽記

安原氏

佛人
延寶元年(一七二三)

支考
年六十四

各務氏

併人
享保十六年(一七四一)

一〇段
年六十七

八日

後桃園天皇の明
和九年(四三三)三
月

得たるは益軒が筆、鈴の屋が菅笠日記なども永く人に忘れられ
ざらん。一句にして吉野を盡くせるもの、名所としては、貞室が
これはく、とばかり花の吉野山
舊跡としては、支考が

歌書よりも軍書に悲し吉野山

などあり。かばかり名だたる地にして古人の筆の至れり盡く
せるを、今更に我等が幼き筆に何をか言はん、何をか記さん。

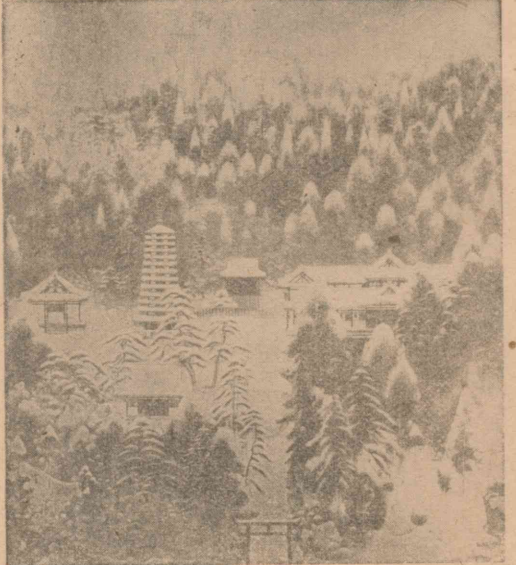
(東園遺稿)

四 残るみ影

本居宣長

八日、昨日初瀬の後、雨降らで、よもの山の端もやうく、あかりゆ
きつ、多武峯のあたりにては名残もなく晴れたりしを、今日も

またいとよき日にて、吉野も近づきぬれば、今朝はいと、足軽く、皆人の心ゆく道なればにや、程もなく上市に出でぬ。この間は



多内堂 武内堂 山笑堂

一里とこそいひしかいと近くて半里にだにも足らじとぞ覺ゆる。吉野川、ひまもなく浮べる筏をおしわけて、こなたの岸に船さし寄す。夕暮ならねば、渡守は早くともいはねど、皆いそぎ乗りぬ。

あなたの岸は飯貝といふ里なり。さて川べに沿ひつゝ、少し西に行きて、丹治といふところより吉野の山口にかゝる。やゝ深

夕暮ならねば
渡守「はや船に
乗れ、目も暮れ
ぬ」といふに
(伊勢物語)

く入りもてゆきて、杉むらの中に四手掛の明神と申すがおはするは、吉野の山口神社などにはあらぬにや。この森より下にも上にも、このわたりなべて櫻のいと多かる中を、上りくゝて上り

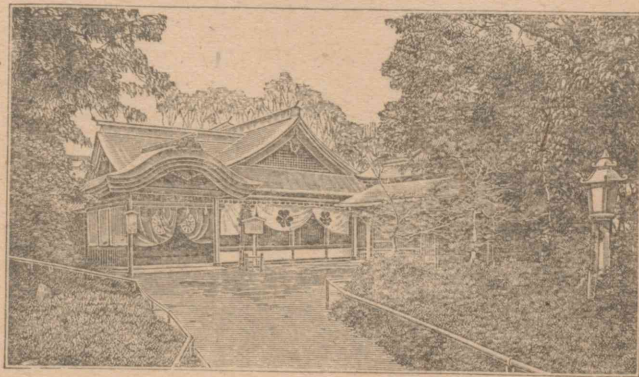
果てたる處、六田のかたより上る道とのゆきあひにて、茶屋あり、しばし休む。この屋



吉野地方

は過ぎこし坂路よりいと高く見やられし處なり。こゝより見わたす處を一目千本とかいひて、吉野のうちにも櫻の多かる限りとぞいふなる。花は大かた盛過ぎて、今は散残りたる梢ども

ぞむら消えたる雪のおもかげして、處々に見えたる。



吉水神社

こゝは吉野の里に入る口にて、これよりは町屋たち續けり。二三町ばかりゆきて、石の階を少し上りたる處に、いと大きな銅の鳥居立てり。發心門とするせる額は弘法大師の手なりとぞ。又二町ばかりありて、石の階の上に二王の立てる門あり。このわたりにも櫻ありて、盛りなるも多く見ゆ。御舟山こゝよりはむかひに近く見えたり。

まづ宿りをとらむとて、藏王堂にはまゐらで過ぎゆく。堂はあ

弘法大師
空海
眞言宗の祖
讚岐國(香川縣)
生
承和二年(一四九五)
寂
年六十一
御舟山
三船山ともかく
藏王堂
吉野山中金峯山
下にある佛堂
本尊は金剛藏王
権現

吉水院
藏王堂の元の供
僧坊
藏王堂を距る凡
そ百三十米
今は吉水神社

なたに向ひたれば、門はうしろの方にぞ立てりける。そのあたりにきよげなる家たづねて宿を定めて、しばしうち休み、物食ひなどして、今日明日の事どもかたらひ、道するべすべき者備ひて、近き處々を見めぐらむとていでたつ。この借りつる宿は、箱屋の某とかいふ者の家にて、吉水院近き處なりければ、まづ詣づ。この院は道より左へいさゝか下りて、又少し上る處、離れたる一つの岡にて、めぐりは谷なり。後醍醐の帝のしばしが程おはしましし處とて有りしまゝに残れるを、入りて見れば、げにもものふりたる殿のうち、のたゝずまひ、世の常の處とは見えぬ。かけまくはかしこけれど、

いにしへのこゝろをくみてよし水の深きあはれに袖はぬれけり

かの帝の御像、後村上の帝の御手づから刻み奉り給へるとおはしますを拜み奉るにも、

あはれ君この吉水にうつり來てのこる御影を見るもかしこし

又そのかみの古き御寶物どもあまた有りて見けれど、悉くはえも覺えず。この寺の内に、さゝやかなる屋の、前うちはれて、見渡しの景色いとよきがあるに、たち入りて煙ふきつゝ見れば、子守の御社の山、向ひに高く、その山にも、かたへの谷などにも、ひまなく見ゆる櫻どもの、今は青葉がちなるぞかへすくゝ口惜しき。さはいへど、奥なる花は盛と見ゆるも猶あまたあり。

みよしのの花は日數もかぎりなし青葉のおくもなほさかりにて（本居宣長全集 菅笠日記）

子守の御社
吉野水分神社の別名

村上義光

名は彦四郎
吉野朝の忠臣
信濃の人
贈從三位

さる程に

後醍醐天皇元弘三年（一九五）閏正月朔

勝手の明神

吉野八神の一
吉野坂路の西側

大塔宮

護良親王
法名尊雲

鎧直垂



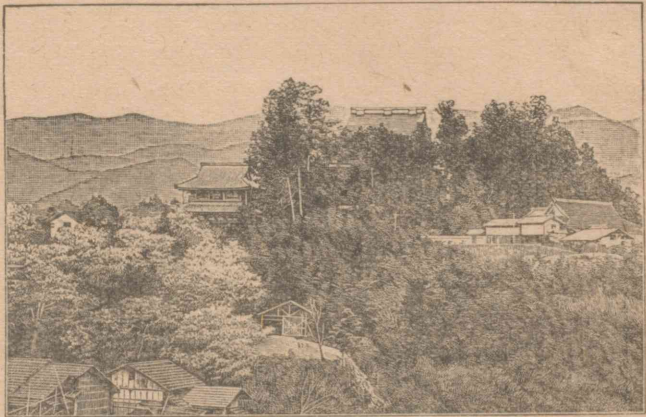
龍頭の兜



五 村上義光

さる程に、搦手の兵、思ひも寄らず勝手の明神の前より押寄せて、宮の御座ありける藏王堂へ打つて懸りける間、大塔宮、今は遁れぬ處なり。と思し召し切つて、赤地の錦の鎧直垂に、緋緘の鎧のまだ巳の刻なるを透間もなく、召され、龍頭の兜の緒をしめ、三尺五寸の小長刀を脇に挟み、劣らぬ兵二十餘人、前後左右に立ち、敵の群がつて控へたる中へ走り懸り、東西を拂ひ、南北へ追廻し、黒煙を立て、斬つて廻らせ給ふに、寄手大勢なりと雖も、僅かの小勢に斬立てられ、木の葉の風に散るが如く、四方の谷へさつとひく。敵引けば、宮は藏王堂の大庭になみ居させ給ひて、大幕打揚げて最後の御酒宴あり。宮の御鎧に立つ所の矢七筋、御頬さき、二の

漢・楚
漢王劉邦と楚王
項籍
項伯・項莊
共に項籍の叔父



御腕、二箇所突かれさせ給ひて、血の流るゝこと瀧の如し。然れども、立つたる矢をも抜き給はず、流るゝ血をも拭ひ給はず、敷皮の上に立ちながら、大盃を三度傾けさせ給へば、木寺相模、四尺三寸の太刀の鋒に敵の首をさし貫いて宮の御前に畏まり、戈鋌、劍戟を降らすこと電光の如くなり、磐石岩を飛ばすこと春の雨に相同じ。然りとはいへども、天帝の身には近づかて、修羅彼が爲に破らるゝとはやしを揚げて舞ひたる有様は、漢楚の鴻門に會せし時、楚の項伯と項莊とが劍を抜い

樊噲
漢王の臣

て舞ひしに、樊噲庭に立ちながら帷幕をかゝげて項王を睨みし勢も、かくやと覺ゆるばかりなり。追手の合戦急なりと覺えて、敵味方の鬨の聲相交りて聞えけるが、げにもその戦に自ら相當ること多かりけりと見えて、村上彦四郎義光、鎧に立つところの矢十六筋、枯野に残る冬草の風に伏したる如くに折懸けて、宮の御前に參つて申しけるは、追手の一の城戸いふがひなく攻破られつる間、二の城戸にて支へて數刻相戦ひ候ひつる處に、御所中の御酒宴の聲すさまじく聞え候ひつるについて參つて候。敵既にかさに取上げて、味方の氣の疲れ候ひぬれば、この城にて功を立てんこと今は叶はじと覺え候。未だ敵の勢を餘所へ廻し候はぬ前に、一方より打破つて、一先落ちて御覽あるべしと存じ候。但し後に残り留つて戦ふ兵無く

ば、御所の落ちさせ給ふものなりと心得て、敵何處までも續きて追懸け參らせんと覺え候へば、恐あることにて候へども、召されて候錦の御鎧直垂と御物具とを下し賜はつて、御諱の字を冒して敵を欺き、御命に代り進らせ候はんと申しければ、宮、いかてかさることあるべき。死なば一所にてこそともかくもならめと仰せられけるを、義光詞を荒らかにして、かゝるあさましき御事や候。漢の高祖滎陽に圍まれし時、紀信、高祖の眞似をして楚を欺かんと請ひしをば、高祖これを許し給ひ候はずや。かほどにいふがひなき御所存にて、天下の大事を思し召し立ちけることこそうたてけれ。はや、その御物具を脱がせ給ひ候へ」と申して、御鎧の上帯を解き奉れば、宮、げにもと思し召しけん、御物具、鎧直垂まで脱替へさせ給ひて、我若し生きたらば、汝が後世を弔ふ

漢の高祖
漢王劉邦が皇帝
の位に即いた後
の尊號
滎陽
河南省開封府漢
陽縣の地
紀信
漢王の臣

べし。共に敵の手に懸らば、冥途までも同じ岐まがひに伴なふべし」と仰せられて、御涙を流させ給ひながら、勝手の明神の御前を南へ向つて落ちさせ給へば、義光は二の城戸の高櫓に上り、遙かに見送り奉り、宮の御後影の幽かに隔らせ給ひぬるを見て、今はかうと思ひければ、櫓の狭間の板を切落し、身をあらはにして、大番聲を揚げて名のりけるは、天照大神の御子孫、神武天皇より九十六代の帝後醍醐天皇第二の皇子、一品兵部卿親王尊雲、逆臣に滅され、恨を泉下に報ぜん爲に、只今自害する有様見置きて、汝等の武運忽ち



村上義光の最期 太平記圖會

第二の皇子
護良親王は後醍
醐天皇の第一皇
子であるとの説
もある

天の川
吉野の奥の地

相馬御風
名は昌治
文學者
明治十六年三月
三新瀉縣生

に盡きて腹を切らんずる時の手本にせよと言ふまゝに、鎧を脱ぎて櫓より下へ投落し、錦の鎧直垂の袴ばかりに、練貫の二小袖ふたこぶせを押肩脱いで白く清げなる膚に刀を突立て、左の脇より右のそば腹まで一文字に搔切つて、腸掴んで櫓の板に投げつけ、太刀を口に銜へて、うつ伏に成つてぞ伏したりける。
追手搦手の寄手これを見て、すはや、大塔宮の御自害あるは、我先に御首を賜はらんとて、四方の圍を解きて一所に集る。その間に宮は引違へて、天の川へぞ落ちさせ給ひける。 太平記

六 惜 春

相馬御風

遠い山には雪がまだ
白く光つてゐるけれど、

うらの山には昨日今日
やるせもなげに鳩が鳴く、

もうぢき春がゆくでせう。

私は嘗て子供たちに歌はせるためにこんなやうな歌を作つたことがあつた。 さまんな鳥が来て さまんな聲で歌ふけれど、私にはあの沈んだ太い山鳩の聲が、最も深く逝く春のあはれをこめてゐるやうに聞えるのである。

ででつぼつぼう、ででつぼつぼう……こんな風にいつてしまふと、少しもさうした感じは出ないが、丘の上のやはらかな草原なんか寝ころんで、あの何處で鳴くのかわからぬやうな、太い沈んだ單調な山鳩のだみ聲を聞いてゐると、私は全くやるせなくなる。何だかそれは山そのものの胸の奥から洩れてゐる嘆

息のやうに、いつしか私みづからもその中へ引入れられてゆくやうに感ずるのである。
しかし、逝く春の哀愁は決して深い悲しみにまで私を誘うて行かない。春を惜しみつゝも私はいつしか初夏新緑のすがすがしさにその心をひきつけられる。そこが秋の暮れゆく寂しさと異なるところである。一日々々寒さが加はり、一日々々木の葉が少くなつてゆき、一日々々草の葉の色がうらぶれてゆく寂しさの中にあつても、私は妙に「秋を惜しむ」といふ気分にはならない。過去りゆく季節に名残を惜しみ、うら枯れゆく草木のものと委に未練を残すといふやうな氣持よりも、もう何としても避難い荒涼の世界へ引入れられてゆくといふ、諦めに近い、いはば底のないやうな寂しさを、私は暮れゆく秋に對して覺える。

それに比べると、暮春の哀愁は底に明るさがある。樂しき春に別れる悲しさはありながらも、その底には新緑の天地に生きる明るさが醸されてゐる。それはいはば生々伸長の一過渡期である。晩秋を以て晝から夜への過渡期ともいふべき黄昏にたとへれば、暮春は正に夜から晝へのそれである曉にもたとふべきである。

春の暮にも雨は降る。秋の暮にも雨が多い。しかし暮春の雨は木の芽を養ふ滋雨であり、暮秋の雨は木の葉、草の葉を枯らす無情の雨である。

丘の上の草原に寝ころび、あの沈んだ太い山鳩のふくみ聲を聞きつゝ、やるせない哀愁を感じながらも、私の心は重く沈んでしまひはしなかつた。暮春の哀愁は晩秋のそののやうに私を薄

暗い部屋の中へは追込まない。むしろそれは私を外の世界へ、
外の世界へと誘ふ。止つてゐるよりも、むしろ歩かせる。何と
いふことなしに一味の甘さを持つた哀愁を胸に抱きながら、私
はあてもなくさまよふ。これといつて確な目あてもないが、私
は常に何ものかを期待してゐる。その漠然たる期待がむやみ
に私を歩かせるのであらう。

暮春は一年中で私の最も多く外の世界を歩き廻る時期だ。野
を歩く、丘を歩く、砂濱を歩く、林の中を歩く。そして私は到る處
であわたゞしかつた生命の春の活動の疲の溜息と、更に新に伸
びんとする生命の希望の瞬とを聴く。

自然はあわたゞしかつた春の活動に疲れて一休してゐるらし
い。しかしそこにはもう緑の五月が用意されてゐる。櫻の花

くたびれて
くたびれて宿か
る頃や藤の花
(芭蕉)

を吹散らしたあわたゞしい嵐が鎮つて、夢のやうに霞んだ無風
に近い幾日かが續く、そして今度吹く時には、それはすっかり面
目を改めた爽かな五月の微風と變つてゐるのだ。

晩春から初夏への私たちの心の推移も、正にかうした大自然の
呼吸と調子を合はせてゐるのだ。それは多感な旅人が、くたび
れて宿かる頃の哀愁から次の日の朝立ちの期待への心の推移
に似てゐる。人生は明日の期待なき旅であつてはならない。
暮春の哀愁はやがて新緑初夏の天地への期待と變らなければ
ならない。

惜春の悲しみにのみ囚はれ果てる人々のあはれさよ。去りゆ
く春にのみ執着する人々のみじめさよ。花を散らす嵐を怨み、
散つた花片を腐らせる雨を恨む人々の愚かさよ。

暮れゆく春は徒に閉籠つて過すべきではない。歩け、歩けと誘ふ自然の示唆のまに／＼野を歩き、丘を歩き、山を歩く者の前にこそ、新緑の爽かな天地が胸を擴げて待つてゐるのだ。苗代田では稲の苗が日毎に伸びる。畑には胡瓜の苗が、茄子の苗が、南瓜の苗が、西瓜の苗が、そして大都會の裏長屋の蜜柑箱の苗床にさへ朝顔の苗が頭をのぞかせる頃だ。到る處に新しき生命の伸長と芽生えとが、過渡期の哀愁の靄の裡に包まれてゐる。(砂に坐して語る)

七 新 綠

五十嵐 力

自然を見る眼が暗いのであらう。私が新緑の美といふものを心から感ずるやうになつたのは、自分で草木を手がけるやうに

五十嵐 力
國文學者
文學博士
早稻田大學教授
明治七年(五三)四
山形縣生

なつてからである。冬の中に寒肥などをやつて、花を待ち若芽を待つもどかしい一日々々が夢のやうに過ぎて、やがて紅い白い色々の花が咲く。そしてそれが散ると、今まで堅く結んでゐた芽が段々にほぐれて來て、米粒・大豆粒位の小さな鱗片狀のつぎはぎの裡から、三寸五寸一尺二尺といふみづ／＼しい若枝が伸びだす、數枚、數十枚の透きとほるやうな若葉が開けて來る、木によつては尺にも餘る直徑の、化けさうな巨大な葉が、丁度手品師が小さい空箱から大きい雨傘を幾つも出すやうに、幾枚ともなく現れ出でて人を驚かす。

およそ植物の一年間の生活の中で、新緑の時分ほど、驚異を現すことはあるまい。而してその驚異が、一々吾等が平生の手當や心遣に反應して來る所を見ると、一枚の葉の開ける所にも、一寸

の枝の伸びる所にも、限りなき喜が湧いて来る。彼等のみづみづしい生長を見るのは、やがて頑是ない子供の福々しく太るのを見る心である。彼等の新しく成長する姿を見ながら、無駄枝、馬鹿枝を剪み切るのは、子供の身體から疣、瘤、腫物を除き去つてやる心である。柔かな枝の匂を妨げる古葉や枯枝を拂つてやるのは、子供の身體から髪を刈り、爪を切り、垢を洗つてやる心である。而して彼等が舊塵をすつかり洗ひ落し、自然の風姿をほしいまゝにして、吾等を招くやうに枝を伸し、葉を伸すところを眺め、晩春の柔かい日光が透きとほるやうな薄緑の葉に濾されて、春温の煙るやうな木の下陰をそゞろあるきする心の喜は、實に何ともいふことが出来ぬ。

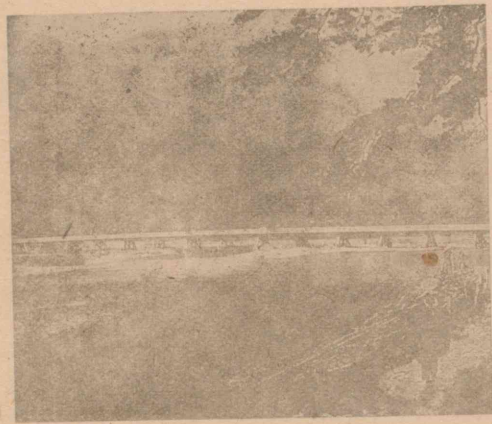
花といへば紅い色を思はせるやうに、緑といへばすぐに青い色を思はせる。けれども「新緑」といふのは、無論新しい木の葉のあらゆる色を含めていふので、緑や青に限つたのではない。「緑の錦」といふのは、この若葉の無数の色を一番力のある緑に統べさせた名前である。

新緑は紅、白、黄、紫など、花のもつて居る無数の色を殆ど悉く備へて居る外に、如何なる花ももつて居らぬ一つの色をもつて居る。それは「緑」である、「青い色」である。西洋では「青い花」といふ詞が、世の中に無いものといふ意味に使はれて居るが、緑の色は、實に葉のみの有する特權である。「緑」は、造化が花に禁じて葉にのみ許した貴い色である。花に取つては禁色であり、葉に取つては、ゆ

るしの色である。あらゆる色を許されて緑のみを許されなかつた花は、いかなる羨みの眼を以て葉を眺めて来たであらう。貧しいながら總べての色を許された上に、禁色の緑を豊に許された葉は、如何なる誇を以て花に臨んで来たであらう。櫻が散つてから栗の花の鬱陶しくにほふまでの五十日は、花に色の數を盡くさせた上に、許しの一色を誇るための葉の季節ではなからうか。植物學者は花は葉の變形だと説いて居るが、さすれば葉といふ親が、自分に存在の意味を留めるために、この一色を美しい子に惜しんだのではなからうか。

吾等は無盡藏なる水や空氣を貴ばぬごとく、多きに馴れて緑の葉を貴ばぬやうになつて居るが、緑の色ほど人に好い感じを與へるものはない。そしてその緑の色の生粹を現したものが新

緑である。新緑は、人間が緑の色に馴れてこれを輕んじようとする心を驚かして、その絶大の價値を覺らしめようとする自然の示威運動である。



山 嵐 の 緑

家にのみ籠つてゐて、殆ど旅行といふものをしたことのない私は、まだ大山・大河・大平野などに於ける大舞臺の新緑の美に打たれたことがない。たゞさういふ景色で、一度は見たいとあこがれて居るのは、嵐山の

新緑である。私は數年前四月はじめの櫻の盛りに嵐山に遊んだことがあるが、あの櫻・楓が常磐木の間に織込まれ、長い枝を川

の上に伸して、澄んだ淵に全き影を映し、淺瀬の白波に青い影を
碎かせて、渡月橋の上十町を装つた景色がどんなだらうと思ふ
と、そゝろに胸の躍るのを、覺えて來る。

新緑は私に取つて、實に花にもまさる喜である。野山の大きな
景色は言ふに及ばず、猫の額のやうな小さい庭の新緑でも、なほ
自分の小さい心に盛り切れぬ喜と感謝とを湛へてくれる。

(我執轉々記)

八 忘れ難き日

姉崎 嘲風

嗚呼、忘れ難きこの日かな。思へばはや五年の昔、春光麗かに南
風薫ずる日、友に擁せられて家を辭し、故國に別れしは、恰も今日

姉崎嘲風

名は正治

宗教學者

文學博士

東京帝國大學名

譽教授

帝國學士院會員

明治六年(五三)

京都生

五年の昔

明治三十三年(二

五〇)

友

高山樗牛

名は林次郎

評論家

文學博士

山形縣生

明治三十五年(三

五〇)歿

年三十二



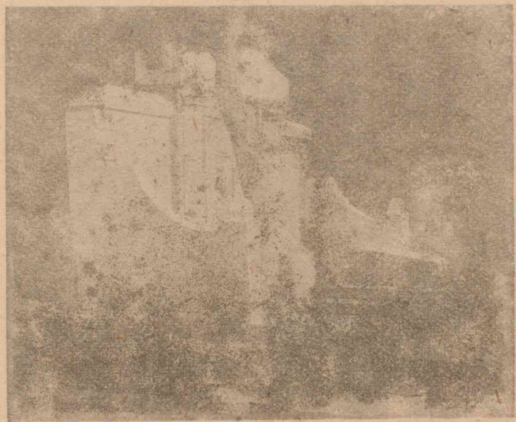
清見潟
津見潟附近

のこの日なりき。帽を振れる客巾を翻せる友、船上艇中相隔り
ては面も定かならず、姿も終には見分かぬまでに消えうせぬ。
「健在なれ、再び早く相見ん」との別れの言葉は尙耳に響き、最後の
握手今尙掌に感ぜられつゝも、見渡せば白鷗飛びかふ海の面渺
として、埠頭の家屋、故國の山川、已に霞の中に入りなき。嗚呼、か
くて相別れたる我が友、今何處にかある。彼はその夜西の方足
柄を過ぎて清見潟のほとりにさすらひ來り、恰もこの海樓に宿
りて離別の悶を遣りしなり。月は去り日は逝きて五年後の今
日この日、我は來りてこの海樓にあれど、彼は既に世を謝して復
相見んに由なく、我をして孤影蕭然欄に憑りて無限の感に沈ま
しむ。

三月君が西航の首途を横濱に送りたる日、予は西の方函嶺を

躑えて駿州に入り、清見瀉の海樓に宿りて離別の関を遣りたりき。その夜月明らかに星稀に、一灣の風光恍として夢の如し。中宵欄に憑りて靜かに君を思ひ、うたゝ人生遭逢のはかなきを歎きぬ。

人生遭逢のいとはかなきを歎じたる彼、今や我をこの世に遣し、獨り我をして離合の泡沫に似たるを歎かしむ。見渡せば、有渡の山、影かすかにして、袖師の松原、雨におぼろなり。彼が埋骨の地、彼が夢遊の山川、すべて晴濤の中に包まれて、海面亦死せるが如し。この海、この地、これ、彼が久戀懷慕の處な



龍華寺高山楊牛の墓

有渡の山
静岡縣安倍郡久
能山の別稱
袖師の松原
三保松原の對岸
埋骨の地
静岡縣安倍郡不
二見村龍華寺



龍華寺と高山楊牛

りき。この夜、この風光、これ、彼が銷魂の種たりしこと幾度ぞ。山海舊の如くにして、彼が友は已に歸り來つれど、彼は今尋ぬるに由なし。昨は彼が墓邊の櫻花散りかゝる寒水石の碑を撫て、今夜、五年前の今日の別離を偲んで彼の遺文に對す。嗚呼、我この流轉の世に處し、この友なくして如何にしてか憂懷を遣らん。されど徒に憂ふるを止めよ。人に百歳の齡なく、世に別離なき人はあらじ。生死は世の常なり。別離は

嗚呼云々
標牛が嘲風に送
つた文の中の一
句

我が友
藤井健次郎
京都帝國大學名
譽教授
文學博士

却つて懷慕の樂しみを深からしめ、懷慕は時と處との隔を越えて神相接せしむ。友こゝにあり、悠久の夜亦こゝにあり。彼が遺文餘薰新にして、我が思慕日毎に彼に通ず。清見灣頭、今宵雨しめやかにして夜靜かなり。形は見えねど、彼は我と語り、松風濤聲亦時に款晤に入來る。嗚呼平生憂を同じうせる君と予と、先世何の契縁かある。身世匆忙として相移り、際遇已に相異なり、生死幽明相隔つといへども、彼と我と長へに相伴なはん。歲月水と流れ去つて五年の昔を今に返す由なけれども、神相接しては生死路相隔てず。三世一心の中に融來つては、彼も我も人相異ならず、靈相同じ。人里には燈火已に影を收め、清見瀉の山海亦眠らんとす。雨よ降れ、夜よ暗かれ、有渡山下、友の墓邊に風靜かなれ。而して我は此處に我が友と相語りつゝ、今宵一夜

の眠に入らん。(倅靈應)

九早 蕨

鍋屋貞柳

富士の山夢に見るこそ果報なれ

路銀もいらざくたびれもせず

木端

世の中は何のへちまと思へども

ぶらりとしては暮されもせず

頭光

ほとゝぎす自由自在に聞く里は

酒屋へ三里豆腐屋へ二里

鍋屋貞柳
本名榎並善八
大阪の人
享保二十年(二四九
三)歿
年八十二
木端
貞柳の門弟
大阪の人
安永二年(一四四
四)歿
頭光
本名岸誠之
江戸の人
寛政八年(一三三
六)歿

朱樂菅江
本名山崎景實
幕府の士
寛政十年(三五六)
歿

唐衣橋洲
年六十一
本名小島恭範
江戸の人
享和二年(三六三)
歿

菜もなき
心なき身にも哀
は知られけり鳴
立つ澤の秋の夕
暮(西行法師)

筆蹟
暮春露
花散し木陰にし
はしとひより
てくれ行春やう
くひすの聲
橘洲

馬場金埜
本名大阪屋甚兵
衛
江戸の人
文化四年(三六七)
歿

雪ならば
雪ならば幾たび

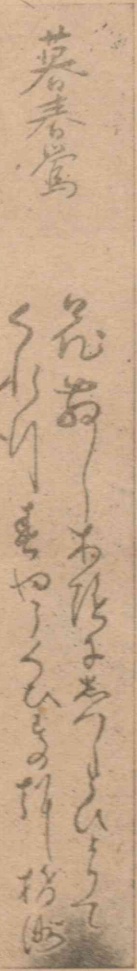
染できぬこんやの月を眺むれば

秋のもなかはたしかあさつて

唐衣橋洲

菜もなき膳にあはれは知られけり

しぎやき茄子の秋の夕ぐれ



唐衣橋洲筆蹟

雪ならばいくら酒手をねだられん

花のふゞきの滋賀のやまかご

馬場金埜

袖を拂はまし花
の吹雪の滋賀の
山越(讀人不知)

元 本網
通稱大野屋喜三
郎
江戸の人
文化八年(三七一)
歿

四方赤良
本名大田 覃
又の號は蜀山人
漢學者
徳川幕府の士
文政六年(三二三)
歿

筆蹟
年七十五

莊周は猫におは
れてうなされん
蝴蝶となりし春
の日のゆめ
蜀山

又ひとつ年はよるとも玉手箱

あけてうれしき今朝のはつ雪

四方赤良

早蕨がにぎり拳を振りあげて

山のよこつらはる風ぞ吹く



四方赤良筆蹟

願はくは通り手形をうち忘れ

あとへかへらん年のお關所

宿屋飯盛

本名石川雅重
國學者
江戸の人
文政十三年(三三)
〇歿
年七十八
天地の

力をもいれずし
て天地を動かし
…ものは歌な
り(紀貫之、古
今和歌集序)
土岐善磨
歌人
新聞記者
明治十八年(五五)
〇東京生

宿屋飯盛

歌よみは下手こそよけれ天地の

動きだしてはたまるものかは

一〇 磯

土岐善磨

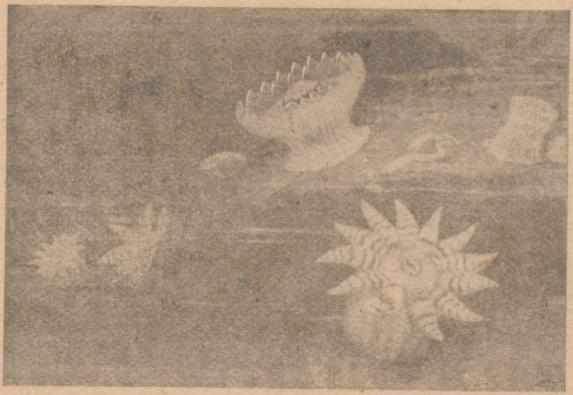
それは海の中でもなく、同時に陸の上でもない。磯といふものは、そのことが第一おもしろい。
波が寄せると、そこは海の中であると同時に、海の底でもあるが、潮が干ると、そこは陸の上であるが、人の住める場處ではない。朝から晝へ、晝から夜へ、夜から朝へ、出没し、隠顯し、變轉し、動搖する。これほどがつちりと存在しながら、これほど自由な適應性を持つてゐるものも、さう多くはないやうな氣がする。環境と

情勢とによつて、Aの如くになり、Bの如くになり、しかもそれが〇であることに相違ないのである。若し人間の生活が、生活の形相が、磯のやうで、しかもその本質がまた磯のやうであり得たら、退屈することもなく、屈託することもなく、一つのこと閉口頓首してしまふこともないであらう。

波の退いた間の磯を歩いてみると、實に千態萬様の生命が、小さく、潑刺と、しかも極めて謙遜な態度で、おののの命冥加を楽しんでゐる。生物學の知識のない者にとつては、動物なのか、植物なのか、よく分別のつかないのも随分ある。動物でもなく、植物でもなく、同時にまた動物でもあり、植物でもあるといふやうなのが、じつと潜んでゐたり、岩陰に動いたりしてゐる。岩の窪みの溜り水に、きら〜と泳いでゐる小さな魚は、潮にとり残され

ドン、キホーテ
イスパニヤの文
豪セルバンテス
作の同名の小説
中の主人公
精神異状で種々
の冒険滑稽を演
ずる

たとは知らずに、そこが大きな海のやうにも思へるのであらう。磯巾着などといふものは、海岸のドン、キホーテみたやうなもの



磯巾着

だ。指の先で、ちよいと突くと、つと純白な潮氣を放つて、どうだ、人間、ま

あつたか。といふやうな顔をしてゐる。押潰す人間の殘虐性などは、その瞬間に青空の中へ消えて、愉快な微笑の對象となるだけである。庭の飛石のやうな岩を踏むと、ゆらゆらと地球のうへにゆらぐ。それをおし返して、陰をのぞくと、小さな

も一言もなかつたことがある。「そこに蛸がある。」かう濱の子供にいはれたのだが、僕には、どうしても蛸があるやうに見えない。「ゐないぞ、そんなものは」といふ僕の言葉の下へ、小さな棒ぎれが動いて、子供が腕を突込んだ途端、肩へまでまっはりつくかと思はれるやうな怪物が、身悶えをしてつかまつた。それはたしかに蛸であつたが、その蛸は、赤い色をしてゐなかつたのである。僕



群魚 若沖 筆

のやうな都會人にとつて、夏の磯は萬物驚異の世界の一つである。(影を踏む)

土井晚翠

名は林吉
英文學者
詩人
第二高等學校名譽教授
帝國藝術院會員
明治四年(二三三)
仙臺生

一一 鷺

紫にほふ横雲の

露や染めけん花すみれ、

花に戯る、蜂蝶の

愛か恨かうつし世の

はかなき春をよそにして、

大空おほぞらのぼる鷺一羽

嵐は寒し、道さびし。

春の姿はたへなれど、

土井 晚翠

花の薫かほはたかけれど、
その春よりもうるはしく、



鷺 本堂印象筆

その花よりもかんばしき、
雲居のをちをめざしつゝ、

大空高く鷺一羽、

嵐はきびし、道かたし。

背には無限の天を負ひ、

緑雲はねにつんざきて、

飛行くはてはいづくぞや、

望のあした持ちきたる
高き薫のあととめて、

大空めぐる鷺一羽、
嵐はつらし道すごし。

嗚呼コーカサス峯高く、
千重の叢雲むらだちて、
下界のひびきやむところ、
天上の火を奪ひ來し
彼のたぐひか青雲の

太空翔る鷺一羽、
嵐ははげし道遠し。(天地有情)

一三 仁和寺の法師

兼好法師

コーカサス
黒海とカスピ海
との間にある山
脈

彼
プロメセウスと
いふ火の神を指
す

仁和寺

京都市右京區花
園町にある古義
眞言宗の大本山
世に御室といふ

兼好法師
俗名吉田兼好
吉野朝時代の文
學者・歌人
正平五年(1100)
寂
年六十九

石清水

石清水八幡宮
官幣大社
京都府綴喜郡八
幡町男山に鎮座

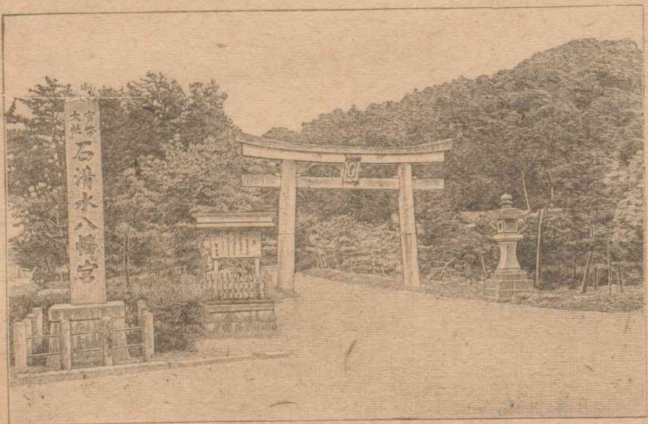
極樂寺

男山の麓にあつ
た寺

高良
男山の麓にある
八幡宮の攝社

石清水詣

仁和寺にある法師、年よるまで石清
水を拜まざりければ、心うく覺えて、
あるとき思ひ立ちて、たゞ一人かち
より詣でけり。極樂寺高良^{かみ}など拜
みて、かばかりと心得て歸りにけり。
さてかたへの人に逢ひて、年頃思ひ
つること果しはべりぬ。聞きしに
も過ぎて尊くこそおはしけれ。そ
も参りたる人ごとに、山へ登りしは
何事かありけむ、ゆかしかりしかど、
神へまゐるこそ本意なれと思ひて、山までは見ずとぞいひける。



石清水八幡宮

少しの事にも先達はあらまほしきことなり。

鼎かづき

これも仁和寺の法師、わらはの法師にならむとする名残とて、各遊ぶことありけるに、酔ひて興に入るあまり、かたはらなる足がなへを取りて頭にかづきければ、つまるやうにするを、鼻をお七ひらめて顔を入れて舞出でたるに、満座興に入ること限りなし。しばし奏でて後、抜かむとするにおほかた抜かれず。酒宴ことさめて、いかゞはせむと惑ひけり。とかくすれば、首のまはりかけて、血垂り、たゞ腫れに腫れみちて、息もつまりければ、打割らむとすれど、たやすく割れず、ひゞきて堪へ難かりければ、叶はで、すべきやうなくて、三足なる角の上に帷子をうちかけて、手を引き杖をつかせて、京なる醫師がりゐて行きけり。道すがら人の怪

しみ見ること限りなし。醫師のもとにさし入りて、向ひ居たり



(草然能入繪) き づ か 鼎

かりはなどか生きざらむ。

たゞ力を立てて引きたまへ。とて、薬

のしべをまはりにさし入れて、かねを隔てて、首もちぎるばかり
引きたるに、耳鼻缺けうげながら、抜けにけり。辛き命まうけて
久しくやみ居たりけり。(徒然草)

一三 長谷部信連

さる程に、宮は五月十五夜の雲間の月を眺めさせたまひて、何の
行方も思し召し寄らざりけるに、三位入道の使者とて、文持ちて
忙しげに出で来る。宮の御乳母子六條佐大夫宗信これを取つ
て御前に参り、開いて見るに、君の御謀叛既に顯れさせたまひて、
土佐の幡多へ移しまゐらすべしとて、官人どもが別當宣を承つ
て、御迎に参り候。急ぎ御所を出でさせたまひて、三井寺へ入ら
せおはしませ。入道もやがて参り候はんとぞ書かれたる。

長谷部信連
以仁王の臣
左衛門尉
建長六年(一九四)
卒
贈従五位
高倉宮以仁王
五月
高倉天皇の治承
四年(八四〇)
三位入道
政
從三位入道源頼
政
御所
三條高倉宮
三井寺
園城寺の別稱
滋賀縣大津市に
ある名刹
天台宗寺門派の
大本山

市女笠



宮はこの事如何せんと思し召し煩はせたまふ處に、宮の侍に長
兵衛尉長谷部信連といふものあり、折節御前近う候ひけるが、進
み出でて申しけるは、たゞ何のやうも候まじ。女房の装束にい
てたゞせたまひて、落ちさせたまふべうもや候らんと申しけれ
ば、この儀尤も然るべし。とて御髪を亂り、重ねたる御衣に市女笠
をぞ召されける。六條佐大夫宗信傘持ちて御供仕る。鶴丸と
いふ童袋に物入れて戴きたり。たとへば、青侍が女を迎へて行
くやうにいでたゞせたまひて、高倉を北へ落ちさせたまふに、大
きな溝の有りけるを、いと物輕う越えさせたまへば、道行く人
が立止つて、はしたなの女房の溝の越えやうやとて、怪しげに見
まゐらせければ、いと足早にぞ過ぎさせおはします。女房
御所の御留守には、長兵衛尉長谷部信連をぞ置かれける。

たちの少々おはしけるをば彼處此處へ立忍ばせて、見苦しきものあらば取りしたゝめんとて見る程に、さしも宮の御祕藏ありける小枝こえだと聞えし御笛を常の御所の御枕に取忘れさせたまひたるをぞ、立歸つても取らまほしうや思し召されけん。信連これを見つけて、あなあさまし。さしも君の御祕藏の御笛を」と申して、今五町がうちにて追つついて参らせたり。宮斜ならず御感ありて、我死なば、この笛をば御棺に入れよ。」とぞ仰せける。「やがて御供仕れ。」と仰せければ、信連申しけるは、「只今あの御所へ、官人どもが御迎に参り候なるに、人一人も候はざらんは、むげに口惜しく存じ候。その上あの御所に、信連が候と申すことをば上、下皆知つたる事てこそ候へ。今夜候はざらんは、それもその夜は逃げたりなどいはれんこと口惜しう候べし。弓箭執る身は、

狩衣



腹巻

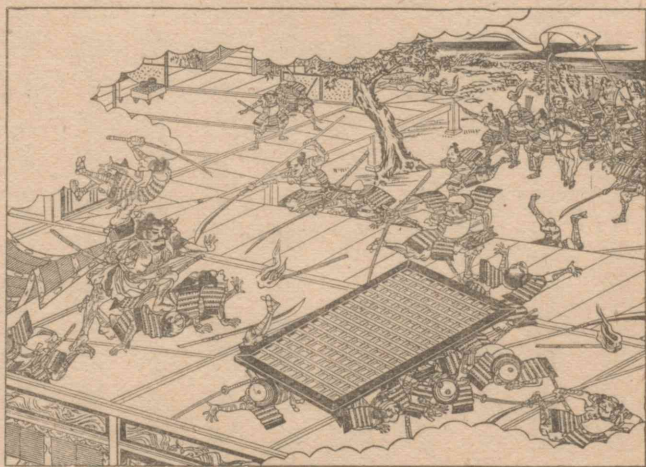


衛府の太刀



かりにも名こそ惜しう候へ。官人どもに暫くあひしらひ、一方打破つて、やがて参り候はんとて、只一人取つて返す。信連がその夜の装束には、薄青の狩衣の下に萌黄匂の腹巻を着て、衛府の太刀をぞ帯おいたりける。三條表の總門をも、高倉表の小門をも共に開いて待ちかけたり。案の如く源大夫判官兼綱出羽判官光長、都合その勢三百餘騎、十五日の子の刻に宮の御所へぞ押寄せたる。源大夫判官は存ずる旨ありと覺えて、遙かの門外に控へたり。出羽判官光長は乗りながら門の内に打入れ、庭に控へ、大音聲を揚げて、宮の御謀叛既に顯れさせたまひて、土佐の幡多へ遷し参らせんが爲に、官人どもが別當宣を承つて、只今御迎に参つて候。疾う、御出候へ」と申しければ、信連大床に立つて、當時は御所

でも候はず、御物詣で候ぞ。何事ぞ、事の子細を申されよ、といひ



長谷部信連の盛平源平の闘會圖

長谷部信連が候ぞ。近く寄つて過ちすな、とぞいひける。廳の

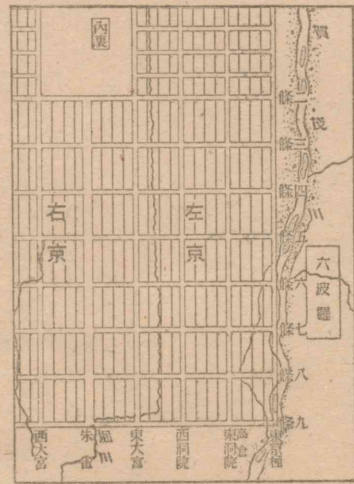
ければ、出羽判官、なんてふ、この御所ならでは、何處へか渡らせたまふべかんなるぞ。その儀ならば、下部ども参つて捜し奉れ、とぞ申しける。信連重ねて「物も覚えぬ官人どもが申しやうかな。馬に乗りながら門の内へ参るだにも奇怪なるに、剩へ下部ども参つて捜し奉れとはいかでか申すぞ。長兵衛尉

下部の内に金武といふ^{たけむら}大力の剛の者、打物の鞆を外し、信連に目を懸けて、大床の上へ飛登る。これを見て同隸ども十四五人ぞ續いたる。信連これを見て、狩衣の帯紐引切つて捨つるまゝに、衛府の太刀なれども身をば心得て作らせたるを抜合はせて、散散にこそ振舞うたれ。敵は大太刀、大長刀で振舞へども、信連が衛府の太刀に斬立てられて、嵐に木の葉の散るやうに、庭へさつとぞ下りたりける。

五月十五夜の雲間の月のあらはれ出でて明かりけるに、敵は無案内なり、信連は案内者にてありければ、あそこの面廊に追つかけては、はたと斬り、此處のつまりに追つつめては、ちようと斬る。「如何に宣旨の御使をばからはするぞ」といひければ、宣旨とは何ぞ、とて、太刀ゆがめば躍りのき、押直し、踏直し、矢庭によき者ども

十四五人ぞ斬伏せたる。

その後、太刀の鋒三寸ばかり打折れて捨ててげり。腹を切らんと腰を捜せども、鞘巻落ちて無かりければ、力及ばず、大手をひろげて高倉表の小門より跳り出でんとする所に、大長刀持ちたる男一人寄りあつたり。信連長刀に乗らんと飛んでかゝるが、乗損じて股を縫ひざまに貫かれ、心は猛く思へども、大勢の中に取籠められて、生捕にこそせられけれ。その後、御所中に亂れ入つて捜せども、宮は渡らせたまはず。信連ばかり搦めて六波羅へ率てまゐる。



京都六波羅附近

源盛卿
 行近衛大將平家
 盛
 清盛の次子
 重盛の弟

前右大將宗盛卿、大床に立つて信連を大庭に引き寄せさせ、誠にわ男は、宣旨の御使と名のるを、「宣旨とは何ぞ」とて斬つたりけるか。その上、應の下部ども多く刃傷殺害したんなれば、能くく糺問して事の子細を尋ね問ひ、その後、河原に引出して首を刎ねよ。とぞのたまひける。信連もとより勝れたる大剛の者なりければ、居直りあざ笑つて申しけるは、「この程あの御所を夜なくものの窺ひ候を、なんでふ事のあるべきと思ひ侮つて用心も仕らぬ處に、夜半ばかりに鎧うたる者どもが二三百騎打入つて候を、何者ぞ」と尋ねて候へば、「宣旨の御使」と申す。當時は諸國の竊盜強盜、山賊海賊など申す奴ばらが、或は公達の入らせたまひたるぞ、或は「宣旨の御使」など名のり申すとかねく承つて候ほどに、「宣旨とは何ぞ」とて斬つたる候。凡そ信連物の具をも思ふや

所
院の御所

入道相國
太政大臣平清盛
入道して淨海と
しよ

うに仕り、鐵良き太刀をも持つて候はんには、只今の官人どもをばよも一人も安穩にては還し候はじ。その上、宮の御在所は何處に渡らせ給ひ候やらん、知り參らせぬ候。假令知り參らせて候とも、侍ほどの者の一度申さじと思ひ切りてんことを、糺間に及んで申すべき様なし。とて、その後は物も申さず。幾らも並みぬたりける平家の侍ども、あつばれ剛の者や。これらをこそ一人當千の兵ともいふべけれ。と口々に申しければ、その中に或人の申しけるは、あれが高名は今に始めぬことぞかし。先年、所にありし時、大番衆の者どもの止めかねたりし強盜六人に只一人追つかゝり、二條堀川なる處にて四人斬伏せ、二人生捕つて、その時なされたりし左兵衛尉ぞかし。あつたら男の斬られんずることの無慚さよ。と惜しみあへりければ、入道相國いか

日野

伯耆國(鳥取縣)
日野郡日野郷

鎌倉殿
源頼朝

が思はれけん、さらばな斬つそ。とて、伯耆の日野へぞ流されける。平家亡び源氏の世になつて、東國へ下り、梶原平三景時について事の根元一々に申したりければ、鎌倉殿神妙なりと感じたまひて、能登の國に御恩蒙りけりとぞ聞えし。(平家物語)

一四 五月雨の頃

萩原井泉水

少し夕焼がして晴間を見せるかと思ふと、夜は星が出るでもなく、漆を塗りこめた間に螺鈿を鏤めたやうな螢がちらちらと光る。梅雨期の情趣の一つであるが、これも草むらの中の蛆からこの美しい光への轉生である。秋になつて可憐な聲をして鳴くこほろぎが産れるのもこの頃である。あの鐵のやうに黒い硬い感じのする身體とは似てもつかず、鶉色の薄斑のある柔か



こほろぎ



螢

萩原井泉水
名は藤吉
俳人
明治十七年(一八八四)
巴(東京生)



い透明な胴をして、細いデリケートな脚をして、壘の上などに出て来る幼いこぼろぎは愛らしい。それでも觸角だけは立派に持つてゐて、新しい世界を感知するもののやうに利口さうに振つたりしてゐるではないか——。朝早く池のほとりなどを行くと、孵つたばかりの蜻蛉が薄絹のやうな翅をしつとりとさせ、まだ飛べないらしい弱々しい身を伏せて、大きな眼ばかりをばつちりさせてゐる。あらゆる若い生命が地上に出て、自分たちの世界の近づいてゐることを感じながら、今はたゞつゝましくその幼さを養つてゐる。かうした時代の緊張した心が五月雨の頃にはある。かの養蟲のやうな、鳴くこともない、美しくもない蟲さへ、この時節に生れ出て、青葉を嚙んでは自分の殻をこしらへる。彼は生得閑人の姿を備へてゐる。口から絲を吐くこ

とは知つてゐるが、蜘蛛のやうに網を編む勤勉さはない。たゞ一條の絲にふらりと自分の身を託して、涼しい風にも吹かれたいと見える。時にはふらりと下つたまゝ篠を突くやうな雨に逢ふこともあるが、彼は驚きもしない。そしてその細い絲が絶たれもしないのである。

養蟲の運の強さよ五月雨

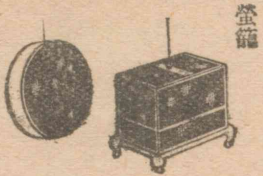
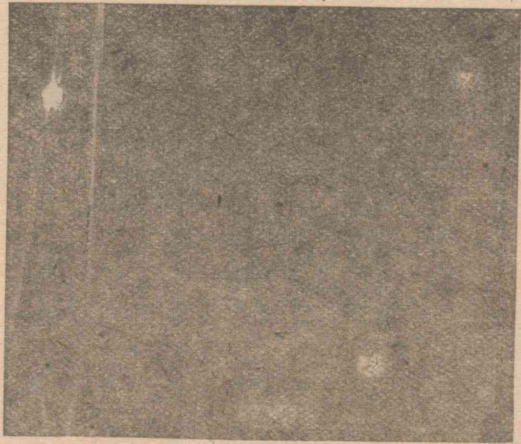
一茶

一茶
通稱小林彌太郎
情濃の俳人
文政十年(三〇七)
年六十五
銀座
東京市京橋區銀座

或夜、五月雨の晴間に私は銀座を散歩した。氣早く中形の浴衣を着た女たちや、青みを帯びた新しい夏帽を被つた青年たちが、飾窓の明るい灯を浴びながら、舗道の上をさやくと、水と石とが磨れあふやうな涼しい音を立てながら流れてゆく。その人の視線を惹く爲に、夜店の商人は百燭光の電燈を吊つて、様々



の文化生活的の器具などを賣つてゐる。そこにこの花やかな
 舗道と少し離れて、横町の小暗いブラタンの木の陰に一群の人
 を寄せてゐるものがあるではないか。私は、何だらうかと近寄つて見
 た。やはり物を賣るらしいが、一つ
 の灯さへも置かず、わざと暗い處を
 選んでゐるのである。よく見ると、
 螢を賣るのであつた。賣る者は人
 造金の指環を賣る者のやうに聲を
 囁らして述立てない。たゞじつと
 暗い中にしやがんでゐて、びか〜とその螢が光つてゐるだけ
 であつて、小さい圓い紗の籠にはいつた螢の六つ七つは銀貨の



蓼太
 大島氏
 江戸の俳人
 雪中庵第三世
 天明七年(一四七)
 歿年七十

一つ二つと代へられていつた。私もその一つを買つて、自分の
 好きな物を買つた子供のやうに、それから外の物に目をくれず
 にすぐ歸りかけた。灯の街を通る時はさもなかつたが、私の家
 に近く家並が暗くなると、手に提げてゐる螢籠が美しく輝き始
 めた。そこらの子供たちは「あゝ、ほうたる〜」などと叫びなが
 ら、私の側に寄つて來たりした。私は家に病んでゐる妻に見せ
 るものとして、これを買つて來たのであつたが――。
 寂しさやわづらふ兒に螢籠

蓼太

或日、竹質性のがちや〜といふ音を立てながら、蛙の聲一つが
 二錢。といつて窓の外を通る者があるので、何かと思ふと、竹の棒
 の先についた輪を振廻すと蛙の聲を出す玩具であつた。私は

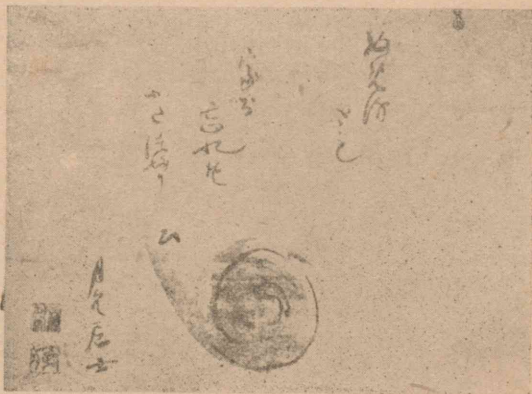
其角

假本氏
蕪門十哲の一人
寶永四年(三三七)
歿
年四十七

筆蹟

ぬめるとも家ぢ
忘れそかたつふ
り 月空居士

これを見て、蛙の聲でさへも、都會の子供は、玩具にまでして慰むものかと興味深く感じた。其角に、かたつむり酒の肴に這はせけり、といふ句がある。私は路端で一人の兒が非常に珍しいものやうに、垣根の竹にゐる蝸牛を見つめてゐるのを見た。そこに稍、年長けた兒が来て、「まい〜つぶろ、お湯屋に喧嘩があるぞ、角出せ、槍出せ」といふ唄をうたふと、三四人の子供が集つて來たが、蝸牛は蓄電器の陽極陰極のやうな二つの觸角を注意深く動かしながら、天氣を豫感しようとする氣象學者のやうな態度



蝸牛の俳畫

ユーモア
滑稽

召波

號は春泥會
蕪村門の俳人
京都の人

阿部次郎

哲學者
東北帝國大學教
授
明治十六年(三四)
山形縣生

で、何か考へてゐる風をしてゐた。この蟲も蛙のやうに雨を好むものであるらしい。形が面白いので、よく俳畫に描かれるが、この蟲が一つ描いてあるだけで、雨の線と、雨季の重たい空氣と、その中に秘められた小さいユーモアを思はせる。

よべの雨馬蘭に殖えぬ蝸牛

蕉の俳句の詠

召波

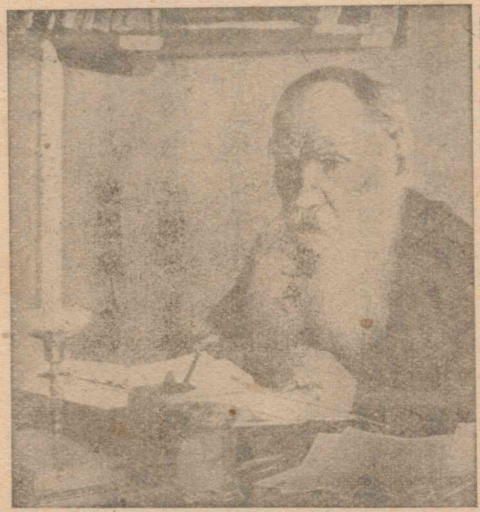
一五 雜草

阿部次郎

去年の秋植ゑたばかりでまだ疎らな芝草の間に、猛烈な勢で雜草が蔓り出した。まだたけの低いうちは、同じ緑の色にまじつてそんなには眼に立たなかつたが、たけの延びるに従つて、それが目障りになりだして來た。それで私は毎朝まだ涼しいうち

トルストイ
ロシアの思想
家・小説家
(西暦一八三九—一九一〇)

に、朝飯前の運動として草取をすることを思ひついた。この頃になれば、宵の口からしつとりとおりる露が朝になつて益、繁く置いてゐるのを、跣足の足うらで踏む冷たさがいゝ心持である。三四十坪ある芝地の片端からそろ／＼と草をとつて行きながら、考へかけてゐることを考へ進めて行くとき、其處には、机の前に坐つてゐるときとは又別様のリズムが生れる。固より私の草取は遊戯の一種に過ぎないが、この遊戯は、私に、筋肉労働は——特に土を相手にする筋肉労働は一種特別の労働であることを感じさせる。筋肉労働だけが労働でないことは言ふまでもない。しかしそれは頭の労働とは違つた一種の労働である。さうしてトルストイなどが考へたやうに、それはあらゆる人にとつて必要な労働であつて、或程度までこの労働と接觸するこ



イ・トルストイの肖像

とを怠るとき、恐らくその人の生活全體に或種類の報を齎さずにはゐられないやうな性質のものである。土を相手にする筋肉労働には、これを無視する者の觸れ得ないやうな、健全な喜と苦しみとがあるであらう。單にこの一點から考へても、土地と農業とを忘れた文化が本質的に人間を幸福にする力があるかどうかは疑はしい。——私にはかういふやうな、身の程を忘れたことを考へながら、芝草の間さまじる雜草を抜捨てて行く。芝草の間にまじつて最も勢力を逞しくしてゐるのは、葉が芝に



どくだみ



かやつり草



葵

似てもつと丈高く伸び、根の方に少し赤みを帯びた、何とかいふ草である。私は一種の憎しみを以て遠慮なしにこの贗者を抜捨ててしまふ。異臭を持つてゐるどくだみも亦私の愛惜を受けることが出来ない。しかし鐵火箸のやうな諛ひけのない莖に、浅褐色の花ともいへぬやうな花をつけてゐるかやつり草になると、私の手は前ほど勇敢にこれをむしり取ることが出来ない。さういふ愛惜の心をもつて芝の間にまじる雜草を眺めはじめると、其處には何といふ多様なかはいらしい植物の種類が、この狭い空間にその生を營んでゐることであらう。圓い葉の柔かなものや、葵の葉のやうな形をして三四葉集つて一つの圓居をしてゐるものや、赤みを帯びた小さい莖を横に這はせながら芝草のすき間に謙遜な自分の領分を占めてゐるものや、見る

に随つて新しい種類が目について來る間に、淡紫や黄色の小さい小さい花さへ咲いてゐるではないか。私はこの小さいかはいゝものを抜捨てゐるに忍びなくなつて、彼の憎むべき贗者だけをあさつて、これを退治して行く。

しかしこの贗者を根絶することだけでも容易ではない。大抵取盡くした積りで一兩日たつと、いつの間にか彼等は又芝より高くそのたけを挺んで、その存在を其處にも此處にも告知らせてゐる。眞晝の光がぎら／＼と照つてゐるうちは、總べての葉が一様にその光を照りかへしてゐるので、それがそんなにも目立たないが、朝の柔かな光が草葉に置く露を目立たせてくれるときには、露を宿して白銀色を帯びたその葉は、とても自分を隠すことが出来ない。かくて又私にはその朝の仕事が與へら

れるのである。(北郊雜記)

小笠原長生

海軍中將
宮中顧問官
子爵
慶應三年(三三三)
舊唐津藩主の家に生れた

一六 葉書文學

小笠原長生

葉書文學——こんな熟語があるかどうか分からないが、とにかく限りある小紙面にもするので、さほどに意を用ひないから、却つてそのなかに筆者の性格が顯れ、書狀とは又別の趣味があつて、存外面白いものである。

私は近頃少しく調べることがあつて、數十年來保存してある葉書類を引張り出して見た。いや色々ながあるので、つい一枚読み二枚読みするうちに、段々興が湧いてきて、とう／＼半日費してしまつた。決して押賣するわけではないが、その中から二三拾ひ出してお目に懸けよう。

八代海軍大佐

名は六郎
後の海軍大將
佩密顧問官
男爵
尾張國(愛知縣)生
昭和五年卒
年七十

八艘

小樽丸
愛國丸
朝顔丸
遠江丸
相模丸
三河丸
佐倉丸
江戸丸
白石大尉
海軍大尉白石霞
閉塞船佐倉丸の指揮官

最初に掲げるのは、對露戰役の劈頭、一管の尺八に風流艦長の名を擅にした淺間艦長八代海軍大佐が、戰役の最中、明治三十七年五月二十九日旅順沖から寄せられたものである。

晋に名高い旅順口の閉塞は前後三回決行せられたが、その中最も壯烈悲惨を極めたのは第三回の時で、八艘の閉塞船に乗込んだ兵員五百五十八名中、我が收容隊に救はれたものは、僅かに六十七名(内戰死四名、負傷二十名)に過ぎなかつた。殊に淺間から選出せられた白石大尉以下の一隊は、悉く名譽の戰死を遂げて、一人も生還したものがなかつたのである。

平素より、熱情火の如き八代艦長の性格を熟知してゐる私は、彼がいかに悶々の情に驅られてゐるかを察してゐた。殊に閉塞決行の直後、淺間の者一人も還らず、予は待つとの悲壯な彼の書

狀に接してゐた私は、即日愚見を開陳したる長文の返書を出した。葉書といふのは、この返書に對する再度の文通なので、それはかうである。

十九日附朶雲拜展。御芳志感謝。職務に忠ならんことを期し、生死を度外に置けとは毎々小生が部下に訓示せる所然るに、今貴兄よりこの身に下示せらる、痛み入りたり。布哇事件の時、君より賜はりたる「天女丸」は白石に贈り候。書籍澤山有難し。無念遣る方なき時、即興詩人」を読み、慰む。敬具。百餘字中に、熱誠も義烈も籠められて、東洋的英雄の風格がその間に躍如として居るではないか。

圖們江畔秋深うして、敵の山も味方の山も、いかにもうつくし

布哇事件

明治二十六年に於ける布哇の革命
當時筆者は高千穂艦隊として布哇に派遣を命ぜられた
天女丸
刀の名
即興詩人
アンデルセンの作
森鷗外漁史の譯
圖們江
又豆滿江
朝鮮の北境を東に流れて日本海に注ぐ川

楡



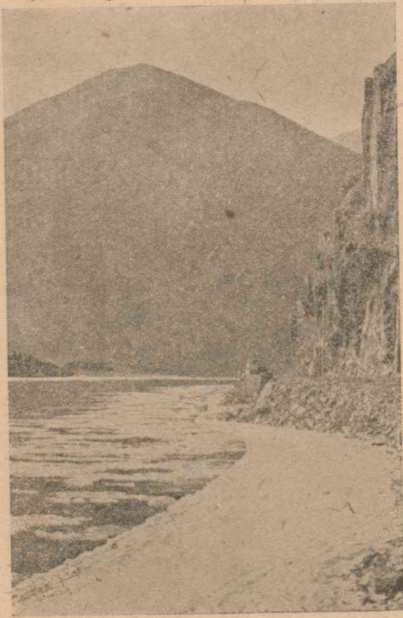
どろ



かしばみ



く紅葉して居ります。わたくしの山は松楡どろかしばみなどて、つぎはぎの錦ですから、山姫も姥となつたかこの山はつぎきれもありはぎきれもあり
どうやら天長節は日本で祝する事が出来さうでございます。
かういふしをらしい文句で、しかも月下哨戒の圖まで淡彩で描かれた葉書が、大本營の私の許に配達せられた。で、差出人はと表面を見ると、
北關出征後備歩兵第三十二聯隊第二大隊本部久留島一等計



山 門 圖

尾上新兵衛
久留島武彦の雅名

筆を投じて戎軒
を事とし
唐の名臣魏徴の
述懐の詩の一句

手

とある。これぞ尾上新兵衛の假名を以て久しく文壇に覇を稱へ、現在は少年團の大立物として海外にまで鳴響いてゐる久留島君が筆を投じて戎軒を事とし、文士のために萬丈の氣を吐き、北韓の天地を睥睨すること一年有餘に及んでの述懐である。知つては、實に滿腔の敬意を表せざるを得ない。就中最後の「どうやら天長節は日本で祝することが出来さうでございます」の一節に、人間味が横溢してゐる。

山姥の申し兒のやうに、高い場所さへ見れば、食指動いて勘辨なりがたく、山といふ山、峯といふ峯を片端から踏破した擧句、此處だ、此處だと打込んで、御輿を据ゑたのが青森十和田の山中にあ

大町桂月

名は芳樹
文章家
高知生
大正十四年歿
年五十七

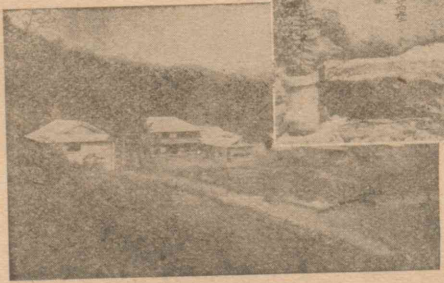
杉浦重剛

教育家
宮内省御用掛
日本中學校長
稱好塾主
近江國(滋賀縣)
膳所藩生
大正十三年卒
年七十一

る葛温泉、降積む雪にほくそゑんで、錦心繡腸を一翰に託し、此處を終焉の地として、遺骨を埋め、記念碑まで建てられたのが、文豪大町桂月君であつた。

私は大正四年五月二十九日、桂月君と共に文部省から大禮奉祝唱歌、詞審査委員を囑託せられたので、會議の席上で度々意見を闘はした。

又一方では、その當時、同君の恩師たる杉浦重剛翁と共に東宮御學問所に出仕してゐたので、それやこれやの關係から、一層親しくなつた。爾來同君は登山の折々よく葉書を送られた。今その中から葛温泉の分を一つ掲げて見よう。



葛温泉と大町桂月

これはたしか大正十二年であつたらう、四月二十三日の日附になつてゐる。

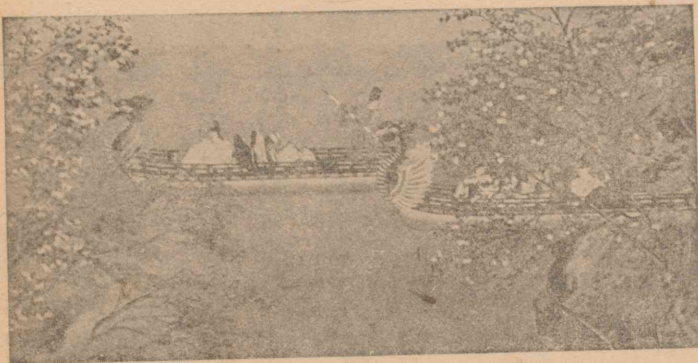
都の花は散り候ひぬらん。奥州の山嶽はすべてみな雪を帯び居り申候。その雪堅くして足陥らず、足を遮るものもなく、峯より峯へと横断縦走自由自在、恰も偉人の天下を濶歩する如くに候。

どことなく垢抜けがしてゐる。やはりうまいなと頷かれる。今や君も逝かれた、杉浦翁も逝かれた。さうして私の手許には、君が猪狩史山氏と共に心血を濺いで著述せられた、杉浦重剛先生が遺されてある。(鐵櫻 春うらゝか 隨筆)

一七 藝苑佳話

猪狩史山
名は又藏
教育家
日本中學校長
明治六年(二三)
福島縣生

御堂關白
藤原道長
關白
法成寺を建立した
萬壽四年(六七)
卒
年六十四
大堰川
京都の西を流れる桂川の嵯峨附近の名
四條大納言
藤原公任
歌人
長久二年(七〇)
卒
年七十六



紅葉の錦

御堂關白大堰川にて遊覽の時、詩歌の船を分ちて、各堪能の人々を乗せられけるに、四條大納言に仰せられていはく、いづの「和歌の船に乗るべし」とて乗られけり。

朝まだき嵐の山の寒ければ紅葉の錦
きぬ人ぞなき

後にいはれけるは、いづれの船に乗るべきぞと仰せられしこそ心おごりせられしか。又詩の船に乗りて、これほどの詩

を作りたらしましかば、名をあげてまし。と後悔せられけり。

鬼の詞

都良香竹生島に参りたりけるに、眺望心にすみて、三千世界眼前盡、といふ句を作りて、その末を案じ得ざりければ、靈天託宣を下して、「十二因縁心裏空」と、一句を加へ給ひけり。

同じ人、羅城門を過ぐとて、氣霽風梳、新柳髮」と詠じたりければ、樓上に聲ありて、氷消浪洗、舊苔鬚」とつけたりけり。良香菅丞相の御前にて、この詩を自讚し申しけれ



竹生島山西翠峰筆

都良香

平安朝時代の學者・儒家
天慶三年（八六〇）卒

竹生島

琵琶湖の北部にある小島
辨財天を祀る

羅城門

昔の平安京の羅城の南方正面の門

菅丞相

贈太政大臣菅原道真

平安朝時代の政治家・文學者

延喜三年（八六三）卒

年五十九

高倉院

第八十代高倉天皇

後白河天皇の第五皇子

養和元年（八四〇）崩

壽二十一

賴政

源三位賴政

治承四年（一一三〇）以仁王を奉じて平氏に抗し事成らずして宇治の平等院に自殺した

年七十七

ば、下の句は鬼の詞なり」とぞ仰せられける。

弓張月

高倉院の御時、御殿の上に、鶴の鳴きけるを、あしきことなりとて、いかゞすべきといふことにてありけるを、ある人、賴政に射させらるべき由申しければ、さりなむとて、召されて参りにけり。この由を仰せらるゝに、畏まりて宣旨を承りて、心の中に思ひけるは、晝だにも小さき鳥なれば得難きを、五月の空、闇深く、雨さへ降りて、いふばかりなし。われ既に弓箭の冥



高倉院退治 高倉谷筆

後徳大寺の左大臣

藤原實定
建久二年(八五二)
卒
年五十三

養由
養由基
楚の人
弓の名手

加盡きにけりと思ひて、八幡大菩薩を念じ奉りて、聲を尋ねて矢を放つ。こたふるやうに覺えければ、よりて見るに、過たず中にけり。天氣より始めて、人々の感歎いふばかりなし。後徳大寺の左大臣、その時中納言にて、祿をかけられけるに、かくなむ。杜鵑名をも雲居にあぐるかな

頼政とりあへず、

弓張月のいるにまかせて

とついたりける、いみじかりけり。まかり出でて後に、

昔養由雲外射雁。今頼政雨中得鵲。

とぞ感ぜられける。(十訓抄)

一八 末ひろがり

大名 罷り出でたるは、隠れもない大名。太郎冠者あるか。

冠者 御前に。

大名 念なう早かつた。汝を呼びいだすは別なる事でない。明

日はいづれもを申し入れうと思ふが、何とあらうぞ。

冠者 まことに内々は御意なうても申し上げうと存ずる處に、一

段でござりませう。

大名 よからうな。

冠者 はつ。

大名 さうあれば、引出物には何をか出さうな。

冠者 されば、何が好うござりませうぞ。

大名 やい、思ひつけた。下からは上が計られぬものぢや。某は

末ひろがりを出さうと思ふが、何とあらうぞ。

冠者 ようござりませう。

大名 汝は大儀ながら、上方へ上り、急いで求めて参れ。

冠者 畏まつてござる。

大名 急げ。

冠者 はつ。さてもく、某が頼うだる者は、立板に水を流すやうに、物をゆひつけられます。まづ急いで参らう。とかう申すうちに都さうにござります。やれさて失念を致した。末廣屋を存ぜぬが、何と致さうぞ。えい、欲しいものは呼ばはる體に見えてござる。某もこれから呼ばはりませうぞ。末廣買はう、末廣買はう。
ナリ 罷り出でたるは洛中に住まひする、心も直にない者でござる。何者やら、どんと申す程に、さわたつて見ませうぞ。

ゆひつけ
言ひつけの訛

のうく、其方は何をわつばとおしやるぞ。

冠者 その事てござる。田舎者でござれば末廣屋を存ぜぬによつて、かやうに申す事てござる。

ナリ のう、其方は末廣といふものをお見知りやつたか。

冠者 のう、都人とも見えぬ。知つたればこれを買はうといふ。

ナリ のうく、誤りました。某は末廣屋の亭主でありやるによつて、懇に問ふでありやる。

冠者 はてしあはせな事てござる。して末廣の出来合はござるか。

ナリ なかくござる。

冠者 急いで見せさつしやれ。

ナリ 心得てござる。それに待たつしやれ。

冠者 は。

ナリ やれさて、賣らうとは申してござるが、何を賣りませうぞ。

思ひつけてござる。これに傘がござる程に、これを持って

賣りませう。のうく、田舎人、それにござるか。これく。

冠、 やは。これが末廣でござるか。

ナリ なかく。

冠者 どれ、見せさつしやれ。

ナリ これ、ごろんじやれ。

冠者 は、まことに廣げさつしやれたれば、はていかい末廣で

ござる。さりながら、頼うだ人が注文をおこされてござる

ほどに、これに合うたらば買ひませう。

ナリ さらば讀まつしやれい。

冠者 先づ地紙良くとしてござる。

ナリ これく、地紙良くとは、この紙の事でありやる。師走狐の

如くこんくといふほど張つてござる。

冠者 骨磨きとござる。

ナリ これく、骨磨きとはこの骨の事、信濃木賊をかけて磨いた

によつて、すべく致す。

冠者 かなめ元締めてとござる。

ナリ かなめ元締めてとは、かう廣げて、この金でもつてじつと締

めるによつて、この事とござる。

冠者 繪は戲繪としてござる。

ナリ ふん、これく、田舎人、これへ寄らつしやれい。えい。

冠者 のうく、其方は田舎人ぢやと思つて打擲めさるか。

ナリ いや、打擲ではおぢやらぬ。こなたと某と、かうして戯れるを以て、すなはち戯繪といひまする。

冠者 さてもく、注文に合うて嬉しうござる。して價は如何程でござるぞ。

ナリ 高直におぢやる。

冠者 幾らほどでござるぞ。

ナリ 萬疋でおりやる。

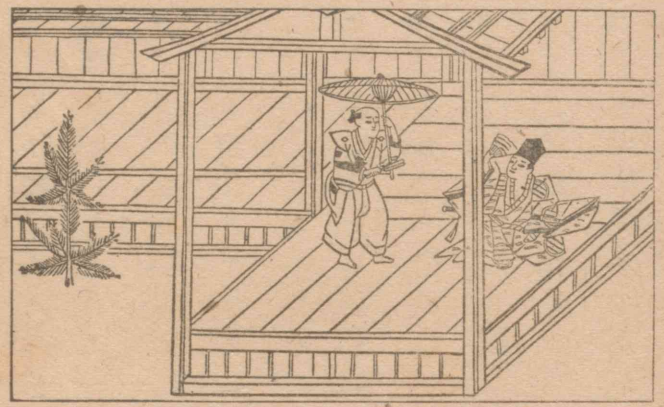
冠者 これはまた高いこととでござる。ちよつとねぎりませう。

ナリ おう、すこしなどは、ぬいてやりませう。

冠者 百ばかりになりますまいか。

ナリ のう、其處な人、その様な下直な物ではない。ようお買やるまいぞ。

三條
京都三條通



り が ろ ひ 末

冠者 申し、何と聞かつしやれたぞ。萬疋の内をば百ばかり

もぬいて下されまいかといふこととでござる。

ナリ はあ、聞分けました。五百ぬいて進じよ。

冠者 忝うこそござれ。

ナリ して、代物は何處で渡さつしやれまする。

冠者 三條の布袋屋で渡しませう。

ナリ これで受取りませう。

冠者 忝うござる。さらばく。

ナリ のうく。

おぢやろさうば
ござらうならば

冠者 何でござるぞ。

ナリ 其方は定めし主持しやうぢでござる。

冠者 なかく。

ナリ 人の主は機嫌の好いこともあり、又悪いこともある。若し自然とも機嫌の悪しうおぢやろさうば、かうおしやつたがようおぢやろ。

冠者 さてもく 忝うこそござれ。

ナリ ようおりやつた。

冠者 やれさて、まづ頼うだ者に、急いてお目かけうず。殿様ござりまするか。

大名 太郎冠者、戻つたか。

冠者 歸りました。

大名 やら大儀や。急いで見せい。

冠者 はつ。

大名 こりや何ぢや。

冠者 末廣でござりまする。

大名 これがや。

冠者 はあ、殿様のお合點が參らぬこそ道理でござりますれ。かういたしますると、きつう廣がりまする。

大名 ふん、まことにこれはいかい末廣ぢやはいやい。して、おのれは注文に合はして來たか。

冠者 なかく、合はせましてござる。それで讀まつしやれませ

大名 急いで合はせをろ。まづ地紙良くと。

冠者 それこそ念をつかひましたれ。この紙の事のござる。師
走狐の如くこんくといふほど張つてござりまする。

大名 して又骨磨きは。

冠者 はつ、此の骨の事のござる。信濃木賊をかけて磨いてござ
るによつて、すべく致しまする。

大名 かなめ元締めては。

冠者 かう廣げまして、この金で締めるをもつて、これがかなめ元
締めてといふ所でござる。

大名 繪は。戲繪は。

冠者 それにこそ念をつかひましたれ。それに待たつしやれま
せい。や、覺えたか。

大名 や。これは何をして居るぞ。

冠者 いや申し、この柄でかうして戯れるをもつて、されゑと申し
まする。

大名 やい、其處な奴。して、おのれは知らぬが定か。

冠者 はいや、存じませぬ。

大名 知らずばこれへ寄り居ろ。末廣とは扇のこと、これはおの
れからかさを買うてうせ居り。いや末廣で候の、戲繪で候
の、某が前へは叶ふまい。退り居ろ。やれさて憎い奴かな。

冠者 まことに頼うだ人のいはるれば、これはさしからかさぢや
げなものをひよんなことをいたした。さりながら、都のも
のも皆までにはぬきませなんだ。機嫌なほしを教へてくれ
た。まづ急いで申して見ませうぞ。はやし、いえい、かさをさ
すならば、かすがやんま、これもかみのちかひと、人がかさを

かすがやんま
春日山
官幣大社春日神
社の鎮座の地
かみのちかひ
神の誓に紙の違
をかけていふ

さそなら、おれもかささうよ。げにもさあり。やよげにもさうよの。いえい、かさをさすならば、かすがやんま、これもかみのちかひと、人がかさをさそなら、おれもかささうよ。げにもさあり。やよげにもさうよの。やよげにもさうよの。

ようか酒
よかるさけの意
か
ひやろく
笛の譜

大名 いかにかやく 太郎冠者、買物にぬかれてはやしものをすると、も前代の曲者、身が前へは叶ふまい。「げにもさあり。やよげにもさうよの。やよげにもさうよの。」買物にはぬかれたが、まづ此方へこけ入つて、鰻の脂をばえいやつと頬張つて、ようか酒を飲めかし。「げにもさあり。やよげにもさうよの。」何かのことはいるまい。「人がかさをさそなら、おれにもかささせやれ。ひやろく、ほつばい、ひやろひい。」

(狂言記)

豊島興志雄

佛文學者
明治二十三年(三
豊島)福岡縣生

一九 蜘蛛

豊島興志雄

蜘蛛は面白い動物である。近代人的な過敏な神経と、偉人的な野性と、自然的な神秘さとを具へてゐる。近代人の神経は何かしら不健康で不氣味である。本来の動物的なものから根こぎにされたやうな趣がある。運動的知覺がひどく鈍く、感情的知覺がひどく鋭い。この運動の方面の知覺と感情の方面の知覺とが不均衡になればなるほど、益、病的に不氣味になつてゆく。——蜘蛛を見てもさういふ感じがする。始終巢の真中にじつとして餌物を待ちすましてゐるところは、いらくしなながら日向ぼつこをしてゐる近代人の倅がある。

そして巢の僅かな微動にも緊張した神経が震へをのゝく様は、單なる觸知でなしに感情的知覺の域にまで踏込んでゐる概がある。あのものぐささと敏感さとは、何かしら病的な不氣味なものがある。

偉人は總べて野性を有するといふのは、否、野性を有してゐなければ偉大な仕事は出来ないといふのは、私の持論である。都會人的な巧妙さと精緻さとしては、大きな仕事は成されない。野性といふのに語弊があるならば、大地の中に根を張つてつつ立つてゐる力とでもいふやうな、何かしら人爲的でない、後天的でない、本質的な力である。——蜘蛛にはさういつた野性がある。彼が如何に精巧な巢を張らうと、如何に過敏な神経を持つてゐようと、それは到底文明的な所産ではない。文明的な所産となり

きれない程、彼のうちには肉食的な野性がある。細い絲に懸つて空に浮んでゐても、地を這ふ蟲けらよりも遙かに大地的であり、遙かに野性的である。

昔の人は、自然に對して一種の神祕的な恐怖を懷いた。そこから、自然力崇拜の宗教まで生れた。然るに、人間の數が増し、文明が進むにつれて、さういふ宗教は、さういふ神祕的恐怖は、遠く山間僻地へ追ひやられて跡を絶たうとしてゐる。けれども、文明のさなかにも、都會の眞中にも、ふとその痕跡が見出されることがある。——蜘蛛はその一つである。薄暗い土藏の二階、物置の片隅階段の裏などに、大きな蜘蛛の巢が張られてゐて、その眞中にあの不氣味な怪物が控へてゐる時、人の心には知らず識らず一種の神祕な恐が湧いてくる。妖怪屋敷や廢墟敷屋に、いつも

女郎蜘蛛



大森 大森市大森區大森町
 玉川 東京市の西郊多摩川の左岸
 赤羽 東京市王子區の内
 市川 東北本線の一驛荒川の右岸
 千葉縣市川市 江戸川の左岸

蜘蛛の巣がつきものとなつてゐるのは、自然そのままの現象ではあるが、また人の心の自らなる聯想作用でもある。蜘蛛のうちでも最も傑出してゐるのは、女郎蜘蛛である。多くの蜘蛛はどす黒い汚い色をしてゐるのに、彼だけは、背と腹部とに幾筋もの金線をめぐらして、誇りかに光り輝いてゐる。多くの蜘蛛は晝間隠れて夜分姿を現すのに、彼だけは、白晝も傲然と巢の眞中に逆さまに控へてゐる。體軀も比較的大きく、最も精悍である。

その女郎蜘蛛は、東京の舊市内には見當らない。私は未だ曾て舊市内でその姿を見たことがない。他の蜘蛛はそれ／＼の種類を舊市内で見かけるが、女郎蜘蛛だけはどこにもゐない。けれども、舊東京市の周圍、大森、玉川、赤羽、市川などには、女郎蜘蛛が

澤山ゐる。

昨年の初秋、私は玉川に行つたついでに、大きな女郎蜘蛛を五六



蜘蛛山邊邊

匹捕へて來た。ミルクの空罎に草の葉を軽く詰め、その間に蜘蛛を入れ、四方に錐で空氣ぬきの穴を拵へて、紐で下げて來たのだが、蜘蛛は別に弱つた風も見えなかつた。庭の木に放すと、のそりのそりと梢の方へ這上つて

いつて、枝葉の茂みに隠れてしまつた。その晩私は楽しく眠れた。「土蜘蛛」や「瀧夜叉姫」などの物語を空

ミルク
 コンデンスミルクの略
 煉乳

土蜘蛛

土蜘蛛の精が美女に化して瀧頭光を惱ますといふ物語

瀧夜叉姫

平将門の遺子と稱する瀧夜叉姫が妖術によつて事を起さうとするのを大宅光國が公命によつて討伐するといふ物語

蛾



想することは、吾々の生活を豊にしてくれる。
 そして翌朝、いつもより早く起きて見ると、何といふ愉快さだつ
 たらう。庭の木々の梢に、あちらこちらと、美事な大きな巣が張
 られてゐて、その真中に女郎蜘蛛が一匹づつ、逆さにじつと構へ
 こんで、背や腹の金筋を朝日に輝かしてゐるのである。私は嬉
 しさの餘り、妻や子供たちを呼んだ。子供たちは始めて見る女
 郎蜘蛛の不思議さと美しさに眼を見張つた。美や神祕に對
 する子供の敏感さよ。だが、田舎の子供たちは、女郎蜘蛛の巢で
 蟬取の道具を拵へて遊ぶのである。

それから私は、毎日女郎蜘蛛を眺めて暮した。少しでも變な氣
 配があれば、蜘蛛は巢を揺ぶつて警戒する。蟬や蛾が巢にかゝ
 れば、一瞬の猶豫もなく飛びついて、くるくると白糸でからめて、

カステーラ
 長崎名産の西洋
 菓子
 イスパニヤ語よ
 り出た

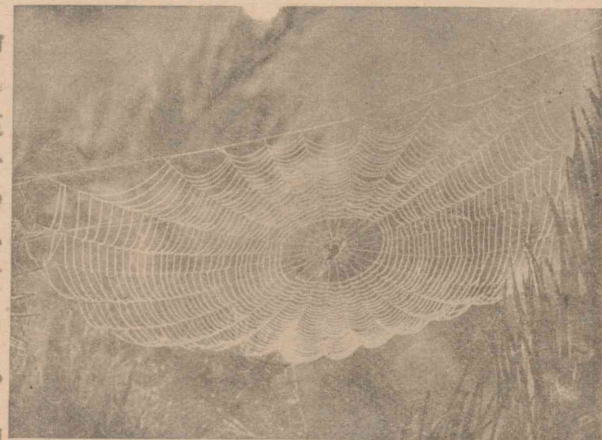


兜蟲

巢の中央に持歸り、暫く様子を窺つてから口をつける。生血を
 十分に吸ふとその腹は大きくなり、食物が不足すると心もち小
 さくしぼんで見える。カステーラの屑をはふつてやると、白糸
 でからめておいて食ひつきはするが、やがてそのまゝ下に落し
 てしまふ。私は幾度も、蛾や兜蟲などをいけどつてはふつてや
 つた。青空の下にすかし見る蜘蛛の姿の、足が長く伸び腹が圓
 くふくれて、背や腹の金筋が美しく輝き出すのが、私の喜であつ
 た。

けれども、蜘蛛は餘り幸福でなさうだつた。風のために巢の
 破れることが多かつた。餌も不足がちのやうに見えた。早朝
 ほの暗い頃、蚊の類の小さな羽蟲が澤山引つかゝつてゐる破れ
 巢の横糸を食つてしまひ、新しい完全な巢を張つてしまふのを

見定めて、私はそれに投與へるべき大きな昆蟲を、どんなにか探し廻つたことだらう。私はそのために、幾日か太陽と共に起きたものである。



蜘蛛の巣

そして凡そ十日ほど過ぎた或日の午後、私は一つの蜘蛛の巣に珍しい光景を見出した。巣の中心から少し下の方に、蜘蛛がじつと動かないでゐる。その一本の足に、羽の黒い足の長い赤蜂が、喘ぎながら一生懸命に喰ひついてゐる。蜘蛛は後向きになつたまま、動かない。

蜂は全身の力を口に籠めて、足先で蜘蛛の巣を拂ひ落さうとし

てゐる。蜘蛛の足が喰切られるか、蜂の足が巣の絲に絡まつてしまふか、恐らく必死の努力であらう。

私は一人氣を揉んだ。勿論蜘蛛に味方してである。しかし迂濶に手出しは出来ない。やがて、蜂がばつと飛んで逃げようとした。とたんに、蜘蛛はくると向直るが早いか、繰出す白絲で蜂を絡めた。次にはもう、蜘蛛の足先でくるく廻轉される眞白なものに過ぎなくなつた。總べてが一瞬間のうちの出来事だつた。私は蜘蛛の勝利を祝した。

私はそれですつかり安心してしまつた。赤蜂は庭にゐる蟲類のうちの最も癡猛なものである。それに打勝つとすれば、蜘蛛に取つては萬々歳である。

ところが、それから二三日後の午頃、一つの巣の蜘蛛が見えない。

そして巢の真中から、一筋の絲が長く垂れてゐる。私は驚いて庭へ下りていつた。巢から垂れた絲は、低い躑躅の茂みにはいり、更に地面に達してゐて、そこに、女郎蜘蛛がぐつたり腹這つてゐる。そして驚くべきことには、躑躅の茂みの周圍に、一匹の赤蜂が飛廻つてゐて、夢中に何かを捜し求めてゐるかのやうに、私が側へ行つても逃げようとしな。私はかつとなつて、女中を呼んで蠅叩きを取寄せ、蜂を叩き潰してやつた。それから、靜かに蜘蛛を掌に取上げた。

蜘蛛はぐつたりとなつたまゝ、生きてゐるのか死んでゐるのか分らなかつた。傷はどこにも見えず、姿勢もくづれてはゐないが、動く模様が更に無い。私はそれを、室の隅に、上から策をかぶせておいた。二三日たつても、蜘蛛はそのまゝで生きかへらな

かつた。そのまるで生きて通りの蜘蛛の死體を、私は庭の隅に埋めた。

それから赤蜂の害が屢起つた。私は赤蜂の姿を見かけると、蠅叩きで叩き潰してやつた。が、赤蜂は次から次とやつて來た。三四匹一緒に飛んでゐることもあつた。女郎蜘蛛の姿が巢に見えないなと思ふと、それは大抵一筋の絲で巢から地面に落ちて、死體となつてしまつてゐた。背と腹との間のくびれた急所に、蜂に喰ひつかれたらしい傷痕が見えるのもあつた。そして、玉川から來た私の庭の女郎蜘蛛は皆赤蜂に害せられてしまつた。残つてゐるのは、たゞ晝間かくれてゐて夕方から巢に出てくる泥坊蜘蛛ばかりである。

女郎蜘蛛のあの美しい色彩は、太陽の光の中で赤蜂の好目標と



泥坊蜘蛛

なるのかも知れない。恐らく赤蜂は背後から狙ひ寄つて、背と腹との間の急所に喰ひつくのであらう。しかし、その死體を別に食ふのでもないらしいところを見ると、何故の襲撃か譯が分らない。それについては、いづれ學者の示教を乞ひたいと思つてゐる。が、とにかく、赤蜂が跋扈して女郎蜘蛛が滅びるといふことは、寂しいことである。

田舎に旅をして、靜寂な自然と素樸な人事とに接する喜の大半は、都會人として、それらに接するところにあるといふことが一面の眞理であるとするならば、都會に住んで庭に蜘蛛の巢を張らせて楽しむのは、野人としての楽しみであるといふのも、一面の眞理かも知れない。しかしながら、蜘蛛を嫌ふ者は性格的に弱者であり、蜘蛛を好む者は性格的に强者であると、さういふこ

とがいはれないものだらうか。偏奇な趣味の對象としては、蜘蛛は餘りに多くのものを持つてゐると、蜘蛛好きな私は勝手な考へ方をしたいたのである。(書かれざる作品)

三〇 日蓮上人

高山樗牛

日蓮上人
法華宗の開祖
安房國(千葉縣)
の人
弘安五年(九四三)
寂
年六十一
勳諡立正大師

日蓮上人は獨り鎌倉時代のみならず、日本歴史上各時代を通じて類稀なる豪傑なり。實に上人は、宇宙間第一の眞理なりと自ら確信せる法華經の大義を唱へて滿天下の衆生を救はんとの大願を起し、この大願の前には如何なる迫害を被るともびくともせずと覺悟し、法華經のためにこの臭き頭を刎ねられんは、砂に黄金を換へ、糞に米を代ふるなりと喝破し、眼中權勢もなく、威武もなく、眞に高天濶地、獨立獨歩の大豪傑なりき。さりとして、豪

法華經のために
「高祖遺文録」に
見えてゐる

邁なる膽氣のみありて溫柔なる人情に乏しかりしかといふに、大いに然らず。上人が人情に篤く、恩誼に深く、その情時としては禽獸の末にまでも及びしことは、後世の人をして感涙に咽ば



日蓮の
大観
の
大観

しむるものあり。今左に一二の例を擧ぐべし。

上人の信者に四條金吾とて江島遠江守の老臣ありき。この人

武士の身分ながら、夙に妙法に歸依して上人の門下に列なり、不惜身命の覺悟を以て、上人と共に種々の迫害を被れり。上人龍口に斬られんとせし時は、路上に馬の轡を執りて慟哭し、刑場に

龍口
神奈川縣鎌倉郡
丹瀬町龍口
鎌倉市の西六軒

身延山
山梨縣南巨摩郡
にある身延山久
遠寺
日蓮宗の總本山

從ひて殉死せんと決心せり。上人は深くこの人の節義に感じ、幾多の消息文を寄せてその至情を表し給へり。就中殿にして若し死後地獄に墮せられなば、日蓮も亦共に地獄に墮すべし。假令釋尊及び十方の諸佛、手を引き袂を捉へて淨土に迎ふとも、振返つて必ず殿と共に地獄に墮すべしとの意を述べられたり。その恩愛の濃かなること喩ふべきものなし。天下の威武を敵として一步も退讓することなき大丈夫の上人にして、他面に於てこの兒女の涕淚ある、殊に貴ぶべきを覺ゆ。

上人が親を思ふ心の切なる、六十年の生涯を通じて最も明らかに現れ、夙に本化門下の龜鑑となれり。殊に晩年、日本六十六箇國、島二つの内に、五尺に足らざる身一つを置く處なくして、身延山の深谷に隠るゝや、九箇年が間、五十餘町の嶮山を一日に一度

筆蹟

法花經第七ニ云
フ、若シ復人有
リ、七寶ヲ以テ
三千大千世界ニ
滿タシ、佛及ビ
大菩薩群支佛阿
羅漢ニ供養スル
モ、是ノ人ノ得
ル所ノ功德ハ、
此ノ法花經乃至
一四句偈ヲ受持
スル其ノ福ノ最
モ多キニ如カ
ズ。(日蓮花押)

池上

東京市大森區池
上本町
日蓮入寂の地
ここに本門寺が
ある。

は必ず攀登りて、遙かに上人の故郷なる房州を煙波の間に望み、
經を捧げて父母の恩を拜謝せられしが如きは、古今東西の如何
なる孝子傳の中に
これと比較し得べ
き美談あるか。
上人病篤くして、甲
州の身延より武州
池上に移る時、身延
山所領の檀越波木
井氏より、乘馬一匹に舍人一人を添へて遣はされけり。上人こ
の馬をこよなく愛せられ、池上に着きて波木井氏に送る書の中
にも馬をいろ／＼いたはしく思ふ旨を書かれ、終りに、知らぬ舍

法花經第七ニ云
フ、若シ復人有
リ、七寶ヲ以テ
三千大千世界ニ
滿タシ、佛及ビ
大菩薩群支佛阿
羅漢ニ供養スル
モ、是ノ人ノ得
ル所ノ功德ハ、
此ノ法花經乃至
一四句偈ヲ受持
スル其ノ福ノ最
モ多キニ如カ
ズ。(日蓮花押)



日
中山法華經寺藏筆

人を付け候うては覺束なく覺え候。罷り歸り候はんまで、この
舍人を附置き候はん^{と存じ候}と遊ばされたるなど、自身の病苦
を厭はず偏に一匹の馬を慈しむ情、たとしへなく貴からずや。
眞の豪傑は人の爲しがたきことを爲すと同時に、人情に篤く、恩
愛に濃かなるものなり。能く人に忍び世に、戻るをのみ偉人の
業と心得るは、豪傑の半面を遺れたるものなり。この情愛なく
ばかの豪邁もあらじ、かの豪邁あればこそこの情愛もあるなれ。
二者表裏し融會して、こゝに豪傑の全人格を造るなり。かの美
はしき蕃薇の織物を見ずや、表に花と刺と別々に織成さるれど
も、その裏面を見れば、花を織る絲即ち刺を織る絲なるにあらず
や。(樽牛全集)

二 故郷の花

入道

平清盛

入道して淨海と

いふ

俊成卿

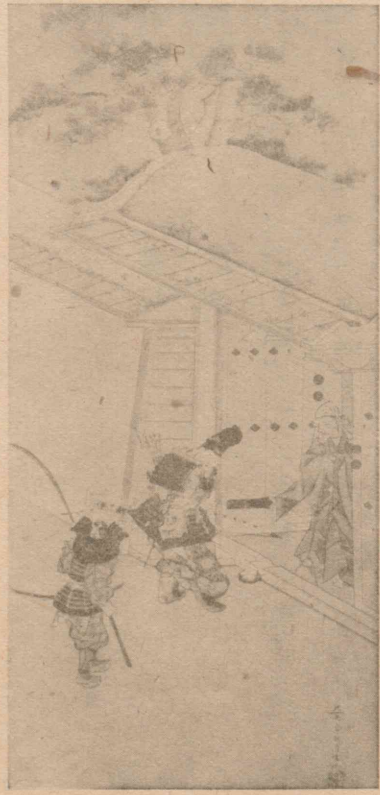
皇太后宮大夫藤

原俊成

薩摩守忠度と申すは入道の舍弟なり。淀の川尻まで下りけるが、郎等六騎相具して、しのびて都へ歸り上る。如法夜半の事なるに、五條三位俊成卿の宿所に行きて門を敲く。内にはこれを聞きけれども、かゝる亂れの世なる上、いぶせき夜半の事なれば、敲けどもく、開かざりけり。餘りに強く敲きければ、やゝ久しくありて青侍を出し、戸を開かせてこれを問ふ。「忠度と申す者見參に申し入れたきことありて參りたり」と答へければ、三位大庭に下り、世に恐れて内へは入れざりけれども、門をば細めに開きて對面あり。忠度のたまひけるは、かゝる身として御爲憚あれども、所詮一門榮華盡きて都に安堵せず、西海へ落ちくだりて侍り。亡びんこと疑なし。世靜まりて後、定めて勅撰の沙汰候

鎧の引合はせ
鎧の胴の前と後
とをひきしめて
あはせるところ

はんか。縦ひ身は八重の鹽路の底に沈むとも、藻鹽草かきおく末の言の葉、後の世までも朽ちぬ形見に傳はり侍れかしと思ひ出でて、川尻よりしのび上りて侍り。これぞ年頃よみ集めたりし愚詠どもにて侍る。身と共に波の下に水屑となさんこと遺恨に侍り。これを砌下に進らせ置き候。勅撰の時は必ず思し召し出でてよ。とて、卷物一卷泣くく、鎧の引合はせより取出でたり。三位感涙を流してこれを受取り、御詠一卷預り置き候ひ畢んぬ。



平忠度俊成を訪ふ
小堀朝音筆

これ永代秀逸の御形見、未來歌仙の指南たらんか。この勿劇の中に御音信に預ること、恐悦少からず候かな。たとひ浮世を萬里の波に隔つとも、御形見をば一戸の窓にをさめて、勅撰の時は思ひ出で侍るべし。とのたまへば、忠度、今は身を波の底に沈め、骨を山野に曝すとも思ふことなし。とて、馬に乗り、古詩を、

前途程遠

大江朝綱の作

前途程遠、馳思於雁山之暮雲。

後會期無、霑纓於鴻臚之曉淚。

と、うちあげ、詠じつゝ、南を指してぞ落ちゆきける。本文には「後會期遙」と書きたるを、忠度還り見るべき旅ならず、今を限りの別れなりと思ひければ、「後會期無」と詠じけるこそあはれなれ。三位も残りの惜しくして、遙かにこれを見送りても、あはれ世に在りしには、この人どもにこそ諂ひ追従せしに、かはるならひと

しのぶ

しのぶ指
つたもの

で、今は門を隔つることの悲しさよと、あはれなるにも涙、優なるにも涙、しのぶの袖をぞ絞られける。

世静まりて後、千載集を撰まれけるに、忠度のこの道を嗜み、川尻より上りたりし志を思ひ出で給ひて、「故郷の花」といふ題に、よみ人知らずとて、一首入れられたり。

さゝ波や志賀のみやこは荒れにしを昔ながらの山ざくらかな

な

とよめる歌なり。名字をも顯し、數多も入れまほしかりけれど、朝敵となれる人のわざなれば、憚りたまひて、只一首ぞ入れられける。亡魂いかに嬉しく思ひけん。あはれにやさしくぞきこえし。〔源平盛衰記〕

ながらの山

長等山
大津市三井寺の
西にある

希臘

歐洲最古の文明國
バルカン半島の南部にある

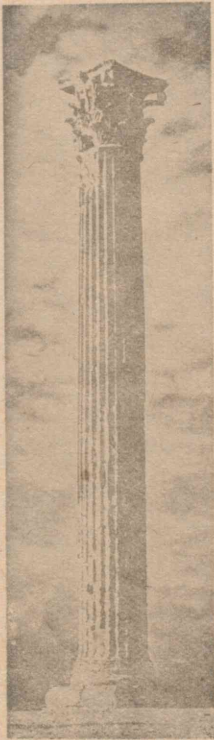
永井 潛

生理學者
醫學博士
明治九年(二五六)
廣島縣生

チャンピオン
選手

三三 古代希臘人の體育 永井 潛

吾等は理想の體育を行つた國民として、二千五百年の昔文明の華を開いた希臘人を回顧し、これを吾等の儀表として仰がなければならぬ。古代希臘の民族こそは、實に文化を造るべく人類



オリーブの塔に於ける
オリーブの塔

を代表せるチャンピオンであつた。教育といはず、藝術といはず、

政治といはず、人間生活のあらゆる方面に於て、吾等の採つて以て模範とすべき立派な仕事を残した偉大な國民であつた。この希臘人、選ばれた人間のチャンピオンであつた希臘人が、如何

スポーツ
競技

波斯
アジアの南西部にある國
古希臘と覇を争つた

なる手段を盡くして、あれだけの大いなる業績をなすべき力を養ひ來つたかといふと、一に體育殊にスポーツに依つてこれを養成し來つたのである。

希臘人はあの立派な文化の仕事を成しとげるまでには、幾多の大いなる困難と戦はなければならなかつた。試に古代の歴史を繙いて見ると、希臘人が文



古代希臘の青年

明の種子を培ふべく如何ばかり辛苦經營したかを目のあたり思ひ浮べずにはゐられない。當時、希臘と相並んで世界に覇を唱へた國は、波斯であつた。しかも人多く地廣き波斯は、連戦連

勝の勢を以て終に小國たる希臘を壓迫して來たのであつた。恰も暴狂ふ猛虎が勇敢なる犬を搏たうとするやうな勢であつたのである。この恐しい壓迫に對して、希臘人は全力を盡くしてこれに對抗し、よつて以て、その文化を擁護し、その精華を開くに至つたのである。

この戦こそは、全く、文明に對する未開の戦であり、貪婪に對する正義の戦であり、抑壓に對する自由の戦であつた。この大いなる戦に光榮ある勝利を得たる希臘人の強い力、抑、何によつて養ひ來たのであるかといへば、實にスポーツであつたのである。

その當時、希臘青年の意氣がいかに旺盛であり、希臘國民の元氣がいかに充實してゐたかは、戦争の際に起つた幾多の挿話を讀

マラソン
希臘國アッチカの平原アテネの東北三十七軒西紀前四九〇年希臘の名將ミルチアデスが十一萬の波斯軍を粉碎した地

んで見ても、追懐するに餘りある次第である。波斯の大軍がマラソンの平野を壓して襲來した。波斯軍の最も得意な武器は弓であつたが、希臘人はこれに對して、たゞその胸を楯として闘つた。即ち危険を冒して躍進し突撃して敵に肉薄し、短劍を揮つて敵を叩き斬るといふより外にせんすべはなかつたのである。希臘軍は必死を期して背水の陣を布き、極めて大膽にこの戦法を實行して、マラソンの奇捷を獲ることが出來たのである。



戦のーレピセルテ



アテネ
古代希臘の首都
章駄天
佛法の守護神
よく走る神とし
て知られてゐる

陸に敗れた波斯の大軍は進路を一轉して、水路希臘の都を衝かうとする戦法に出た。その時希臘の一勇士キネゲイロスといふ者が、敵の逃ぐるを追駈けて海濱へ來た、折しも敵の兵船が一艘軍兵を満載して將に岸を離れようとしてゐた。彼は右の猿臂を伸ばして船を抑へた。敵は直に右の手を斬つて落した。キネゲイロスは更に左の手を以て舷を抑へた。敵は又その左手を斬つた、彼はいきなり大きな口を開いて舷にしがみついた。その刹那、あたり勇士の首と胴とが所を異にしたといふ悲壯な物語がある。

更にまた、マラソンの平野に、希臘軍が波斯の大軍を撃破した時、この戦勝の報告を出来るだけ早くアテネの市民に聞かせたいといふので、オイクレスといふ青年が、章駄天の如くに走り続け

弘安の神風

弘安四年(西暦)元寇襲來の際その兵船を覆したといふ海風
湊川の孤忠
楠木正成の湊川に於ける戦死
藏王堂の屯難
村上義光が護良親王に代つて吉野の藏王堂で切腹したこと
レオニダス王
スバルタの王
西紀前四八〇年
テルモビレー時
で名譽の戦死を遂げた

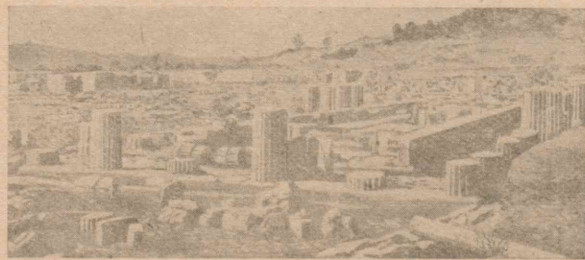
た。さうして城門に着くや否や「我が軍勝てり」と叫ぶと共に息は絶えた。これに因んで行はれるマラソン競走は、永遠にこの壯烈なる勇士の愛國の精神を稱へてゐる。

史を緋いてこゝに至る毎に、或は弘安の神風を思ひ、或は湊川の孤忠を偲び、或は藏王堂の屯難ちゆんなんを悼み、感極つて涕下るのである。しかも、かやうな挿話は希臘史の到る處に續出してゐる。剛勇賢明なるレオニダス王の戦死の如き、最も光榮ある希臘精神の發露に外ならぬ。實に希臘青年のこの磐石の如き大勇猛心、この熱烈なる愛國の至情は、西歐文化の基礎を据ゑ、長へにその生命を繋ぎ得たのである。しかも希臘は何によつてそれを養ひ來つたか。全く眞のスポーツが行はれた賜であつたのである。古い西洋の都市では、何れも防禦の爲に城壁が築かれてゐる。

スバルタ
 古代希臘ラコニ
 ヤの首都
 ニーロタ河畔に
 ある

然るにスバルタの都には少しも城壁がなかつた。實にスバル
 タ青年の胸が金城鐵壁であつたのである。彼等の胸に湧立つ
 血潮の一滴々に護國の鬼神が宿つてゐた
 のである。

抑、人間の人間たる本然の性は、眞と善と美と
 に憧憬して止まないことである。希臘人は
 この眞善美を追求し、これを啓發せんが爲に
 體育を施した。由來希臘人は美にあこがれ
 る國民であつた。世界が嘗て持ち得た最も
 偉大なる藝術の多くは、二千年も昔に希臘人
 によつて創作せられ、永くその規範が遺され
 てゐるのである。そして又希臘人は、その美の極致が自分自身



趾遺のヤビンリオ

の身體にあることを夙に見て取つたのである。その證據には、
 圓滿具足せる全知全能の神を象るものとして、多くの文明人及
 び未開人が、怪異珍奇何れも恐るべく驚くべき形を借りて來て
 るるに反して、獨り希臘人のみは、人間の體によつて神を現さう
 としてゐる。それは希臘人が、人體を以て、何物にも譬へ難い、何
 物にも擬へ難い美の極致であると信じてゐたからである。か
 くの如くして、希臘人の體育は、美を憧憬し、美を感受し、美を尊重
 し、自分自身の持つてゐる美を出来るかぎり立派に完成しよう
 といふ人間愛の進りであり、自分のもつ最も貴きものを愛護す
 るといふ熱烈な精神を背景としてゐたのであるから、そこに奥
 深い根柢があり、燃ゆるが如き熱誠が籠つてゐた。更にまた希
 臘人は眞を熱愛する人間であつた。眞理を求むる心と、眞理に

よつて與へられる尊きものを獲得することの光榮と、この二つの願望が、希臘人をして、體育の中でも殊に競技に重きを置かしめ、國を擧つて競技を喜ぶ風尚となつて現れて來たのである。

(人及び人の力)

吉田賢龍

教育家
廣島文理科大学
名譽教授
明治三年(三五〇)
石川縣生

二三 人間の眞價

吉田賢龍

人は智力が足りないとして決して歎くには及ばない。人間の眞價は智力を適當に統制する道徳力によつて定まるのである。その道徳力は一般に公平に分配されてある。これを發揮するとせざるとは、それこそ吾々の責任である。吾々はこれに對して一言半句の不平を言ふことが出來ない。釋迦の弟子に離婆多といふ人があつた。この人は一を聞いて

離婆多

佛弟子の一
阿羅漢

周梨槃特

佛弟子の一人
近松門左衛門
江戸時代の大戯
曲家
享保九年(三三〇)
歿
年七十二

舍利弗

佛十大弟子の隨
一
智慧第一と稱せ
られる

阿難

阿難陀
佛十大弟子の一
多聞第一と稱せ
られる

迦葉

摩訶迦葉
佛十大弟子の一
頭陀行第一と稱
せられる



説法する釋迦

十を悟る賢い尊者であつた。その弟に周梨槃特といふ名高い愚者があつた。近松門左衛門の淨瑠璃の中には周梨槃特の名が三箇所にも出てゐる。實にかれの愚さは天竺・唐・日本の三國に響き渡つてゐたのである。釋迦は個性教育に重きをおき、その人々の才能に應じて法を説いた。「舍利弗、お前は賢いから、ちとむづかしいことを授ける。」
「阿難、お前は覺えがよいから長いことを授ける。これをこの次までによく覺えて來よ。」
「迦葉、お前は實行家であるから、この次までにこのことを實行して來よ。」といふ風に法を授けて行かれ

た。「周梨槃特、お前は、覺えが悪いから、次の簡単なことを授ける。『三業に悪を作らず、有情を傷めず、正念に空を觀ずれば無益の苦しみは免るべし。』これを誦して來よ。」と。而して釋迦は大抵三日或は五日にして再び弟子を集めるのである。その間、弟子たちは一生懸命に授けられたそれを練習するのである。殊に周梨槃特は熱心家であるから、晝夜殆ど不眠で誦讀につとめた。しかしあとから「と忘れてしまふ。彼は衆人の居る所では恥づかしいから、曠野に出て誦讀に耽つてゐた。すると、ひそかに傍に聽いてゐた牧羊者が覺えてしまった。彼は忘れると、牧羊者に頭を下げてきくのであつた。

かくて愈、次の會の日が來た。釋迦は順次に前日の問題について尋ねて行かれる。舍利弗は智慧第一であるから、むづかしい

ことも立派に説示する。阿難は多聞第一であるから、長いことを一句も落さず高誦する。迦葉は頭陀行第一であるから、自分ほこれだけのことを實行したと體驗を語る。順番が周梨槃特に及ぶと、彼はすつくと立つて、三業に悪を作らず、もうあとには出ない。眞赤な顔をして努めてゐるが、どうしても二の句がつけぬ。傍に聞いてゐた兄の離婆多是もうたまらない。衆に對して恥づかしくて仕方がない。弟の所に行つて、お前のやうなものとはとても佛の弟子になることは出來ぬ。吾々の仲間入は不可能である。といつて、首筋をつかんで會場の外へはふり出してしまつた。

釋迦は残りの者の復習を終へ、散會して歸りの途中、周梨槃特が獨り悄然として佇んでゐたのを見て、お前はそこに何をしてゐ

る。と聞くと、彼は「世尊よ、私はどうしてかやうな愚者であるのでせうか。とても世尊の弟子になることが出来ません。何といふ情ないこととせう。」と言つた。釋迦は「お前は自分の愚さを知つてゐるか。」彼は「私は愚者の中の極愚の者です。」釋迦は「それならいゝ。愚者が愚と分つてゐれば、それこそ賢者である。何も心配するには及ばない。授かつた四つの句が覚えられなかつたら覚えずともよい。それならかうしよう。」といつて、持つて居られた箒を一本與へられて、これで朝夕部屋を掃除するとき、「塵を拂はん、垢を除かん。」と呼びなさい。それ位なら出来るだらう。」と言はれた。それから彼は教へられた通りに、毎日塵を拂はん、垢を除かん。」といつて掃除してゐた。實際掃除をしてゐるのだから忘れつことはない。かくて幾日かを經過するうち、氷結し

たやうな彼の腦髓にも一道の光明がさして來た。「塵とは何ぞや、垢とは何ぞや。こゝに掃きよせてゐる塵や垢のことではなく、心に染みついてゐる塵垢のことを世尊は意味して居られるのである。」と分つて見ると、今まで大いに苦しんでゐたから、この自覺と共に、心氣爽然、染汚を一掃して、八面玲瓏、玉の如き人間となつた。即ち彼は悟を開いたのである。大阿羅漢果を得たのである。

周梨槃特のやうな馬鹿者が悟を開いたといふことは、大衆に對して大いなるセンセイションを捲起した。そこで釋迦は大衆の集つて居る所へ周梨槃特を紹介された。さすがに以前とは違つて引きしまつた顔付をしてゐる。釋迦は大衆に向つて、悟を開くといふことは、澤山のことを覺えるといふことではない。

センセイシ
ン
感動

小さなことのたつた一つでもよい、それに徹底しきへすれば、即ちよいのだ。見よ、周梨槃特は箒で掃除することに徹底した。そして解脱した。と言はれた。かくて周梨槃特は正覺を成就して大弟子の仲間に入ることが出来た。大弟子には前に言つたやうに各、長所がある。周梨槃特のは、神通說法第一といふのである。彼は愚者、何も辯説することが出来ない。たゞ沈黙するのみである。この沈黙が說法となつて、多くの人を感化することが出来た。

かくの如く、智力に於てはお話にならぬ程の貧弱な頭腦を持つた者でも、道德的、宗教的には第一等の人間となる事が出来るのである。人間としての有難い所は即ちこゝにある。吾々が人生を感謝謳歌するのは、たゞこの一點にある。

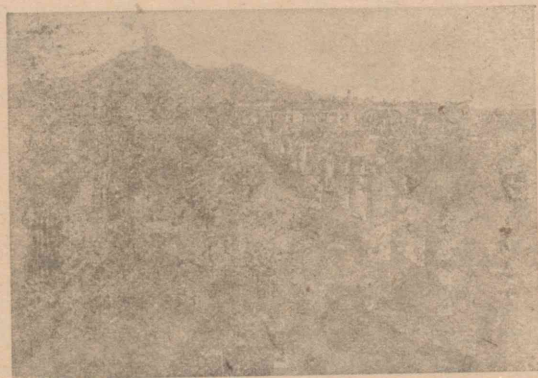
人は賢愚の別によつて、はた機縁の幸不幸によつて、社會的地位に大いなる懸隔等差を生じて来る。たとへば軍人にも大將より兵士に至るまで、種々の階級の差別があり、官吏實業家にも、幾多の差等がつけられてある。しかし大將であるから人間として價値が貴い、尉官であり兵士であるから賤しいといふことであつたならば、天下幾十萬の軍人は泣きの涙で日を暮さねばならないだらう。彼等は皆大將にならうとしても、またなる資格があつても、大將の數に限りがあるのを如何せん。人間の眞價は寧ろ、各、その天分を自覺して、これを實現するといふ所に存する。職務を怠つて居る大將よりも、天職に忠實である兵士の方が人間として貴いといふ所に、軍人としての生々とした心持が存するのである。

ベスピヤス
イタリーのナポ
リ海岸の活火山
ポンベイ

古代イタリーの
ナポリ海岸の都
西暦七九年ベス
ピヤスの大噴火
によつて埋没し
た

ローマ
イタリーの首府

今より千九百年の昔イタ利の名高い火山ベスピヤス山が爆發したとき、その麓に近い所にあつたポンベイといふ立派な市街



ポンベいの遺蹟

が、一朝にして熔岩熱灰の爲に埋められてしまつた。近世になつて伊太利政府が掘出して、茲に千九百年前の古い市街が現出した。劇場、公衆浴場等の立派な遺址があつて、ローマの殷盛の絶頂に於ける文化の跡が歴然として見られるのである。始めて掘出したときには、人間の死骸がそのまま灰となつて残つてゐた。これは歴史上の絶好参考資料となるのである。然るに露出されると直に崩

ナポリ
イタリーの都市
ナポリ湾に臨む

壊してしまふので、伊太利政府はこれに石膏を流しこんで、石膏の人形として保存することにした。これがポンベイの陳列場やナポリの博物館に出陳されてあるのを見ると、その時に於ける様々の悲惨な情態が想見せられるのである。

發掘にあつて、當時海岸であつた處を掘出したところが、そこには多くの人々が組討をしたまゝ倒れてゐる群像が現れたといふことである。これは爆發の際、船を争うて逃げようとして、遂にそのまゝ埋められたのである。その組討をしてゐる中には、魚屋も八百屋も、熊公も八公もゐたことであらう。然るにその中に高位高官と覺しき者も混じてゐたといふことである。人間の情ない所は、かゝる時に暴露されるものである。ところが山手方面を掘出したとき、兵營の前、番兵の立つべき所に、一番

兵が長い剣をつけたまゝ、一步も自分の立つべき點を退かず、儼然として、殆ど氣をつけの姿勢で空を睨んで立つてゐるのを掘出した。英國の名畫家ヘンリー・ポインターはその事實を聞いて大いに感奮し、材料を十分に調査して一枚の油繪をかき上げた。焼石熱灰が飛散し、人々の狼狽して居る有様を背景として、一個の番兵が劍を持つたまゝ、毅然として立つて居るのを描いたもので、題して「死に至るまで忠實に」といふ。この繪がまた非常に名高くなつて、こ



死に至るまで忠實に
ヘンリー・ポインターの筆

の話が世に廣く傳へられた。海岸に於て醜い死にやうをした高官の人と、番兵としてその職に殉じた一等兵か二等兵と、社會上の地位には非常な隔りがある。が、人間としての眞價はいづれにあるであらうか。これは言はずして明らかである。

(内的生命觀)

二四 古錢配分の記

福澤諭吉

福澤諭吉
明治時代の大家
育家
慶應義塾の創設
者
豊前(大分縣)中
津藩士百助の子
明治三十四年(二
五)歿
年六十八
堂島
今の大阪市北區
の内

汝等の大父福澤百助君は舊中津藩の士族にして、年二十四歳の時より、公用を以て大阪堂島の藩邸に住居し、我等の兄弟姉妹五名は共に大阪に誕生し、大父君は年四十五、該邸に於て長逝し給へり。君幼少の時より學を好み、師に就きて頗る才名あり。獨り才學を以て文名を地方に専らにするのみならず、その天稟温

今
この記の成つた
年即ち明治十一
年(五)

良にして能く物を容れ、思想磊落にして私徳極めて方正、常に人のために畏憚せられたりといふ。君の長逝は今を距ること四十餘年の昔なり。余は不幸にしてその容貌をも知るに由なしと雖も、在世中の言行はこれを汝等の大母に聞きて詳かならざるはなし。

青錢
寛永通寶

大父君大阪に住居せられしとき、好んで古錢を集めて樂しみとなせり。當時大阪の通用錢は、今の銅錢即ち青錢なるものを一文と唱へ、九十六文を錢緡せんじに貫きてこれを九六の百文と名づけ、緡のまゝに用ひたることにて、これを受授するの際必ずしも錢の數を計へず、大凡その緡の長短を一見するのみにして、たとひ或は一二文の過不足あるもこれを問ふものなく、又世間一般に於ても殊更に緡の錢を減じて利を貪るが如き奸詐も稀なる風

仲使

藩米を取扱ふ人

安治川

淀川の支流
大阪市の西北部
を流れてゐる

貞享年中(三四四
—三四四) 河村瑞

軒開鑿

雜魚場

今の大阪市西區
の内

承應年中(三三三
—三四四)より魚市

場として知られて
ゐる

習なりき。或日大父君九六の錢緡二三條の内より、古錢幾文かづつを選出してこれを取り、その餘は又緡に貫きて舊の如くなし、これを放却して、家人に告ぐるを忘れて外出せり。日暮家に歸りて錢緡の所在を聞けば、豈圖らんや、家人はその錢を九六の全緡と思ひ、當日魚の代に拂ひ渡したりといふ。大父君獨り大いに驚き、その肴屋の名を聞けば、生憎平日出入の者に非ずして、家内婢僕に至るまでこれを知るものなし。君の憂慮益甚だしく、乃ち家人の直に魚屋に接したる者を召し、その年齢容貌の大概より衣服荷物、天秤棒の様子に至るまでも逐一聞きて詳かに記し、竊に藩邸の仲使を雇ひ、堂島に來る肴屋とあれば必ず安治川か雜魚場ぞうぎばならんとて、これを物色搜索せしむること兩三日にして、はじめて本人を見出し、これを家に呼んで自

ら事の次第を語り、先きの錢糶に不足の錢五文か十文を拂ひ、他に又煩勞を謝するためとて若干の錢を與へて、不注意の罪を肴屋に詫びたりとぞ。

この一條は當時藩邸の内外に知る者なし。吾々兄弟姉妹も極めて幼少の時のことなれば、たとひこれを見るもこれを解せず、その事情を詳かにするものは唯汝等の大母一人のみ。思ふに大父の性質として、名聞の嫌疑を避けたるものならん。然りと雖も事既に過去に屬したり。況や君の長逝は四十餘年の古に在り。余は今日に在つてこの事實を湮没するに忍びず。よつてこれを汝等に告ぐ。思ふにこの事たる、嘗に福澤家の美事たるのみならず、天下道德の美談といふも可なり。汝等生長の後には、公然これを人に語つて先人の美德を發揚せよ。又これを發

堀川

京都市内を流れる堀川の清流に沿ふ地區

伊藤仁齋

江戸時代の京都の儒者

古學派の鼻祖

寛永二年(三六三)

卒

年七十九

贈正四位

伊藤東涯

江戸時代の儒者

仁齋の長子

元文元年(三五六)

卒

年六十九

贈從四位

野田笛浦

江戸時代の儒者・詩人

丹後の人

安政六年(三五九)

卒

年六十一

贈正五位

揚すると共に己自ら省みる所なかるべからず。この祖父にして如何なる孫あるべきか。汝等は名家の子孫なり、子孫にして先人を辱しむると否とは唯汝等の一心に存するのみ。蓋し大父君は單に正直の一偏に依頼して身を立つるが如き小丈夫に非ず。壯年の時より藩の會計官吏となりて大阪の藩邸に在勤し、當時の富豪・大賈に接近して財政の衝に當り、或は藩米を賣り、或は藩債を募り、金利の高低を論じ、返濟期限の緩急を談ずる等、大阪町人との社會的交際に俗中の俗を極めて、恰も二十餘年を紅塵の間に消磨したるが如くなれども、忙中自から閑あり、一方には深く文事に志して、學流は堀川の伊藤・仁齋・東涯の經義を悦び、殊に文章を善くして、詩も亦あり、野田笛浦の如きは親友中の一人なりき。

されば君の一身は俗吏なり、又詩文家なり、心事極めて多端思想極めて廣くして一方に偏することなく、前記肴屋の談の如きは唯その素質の偶然にも溢れて事に發したるまでのことなれば、この一細事固より以て君の平生を盡くすに足らず。余が持論に於ても、人の正直のみを唯一の徳義と認め、畢生の能事了るとして一向にこれに心酔するものに非ざれども、骨肉の私より汝等のために謀れば、この細事も亦自ら先人の言行録中に現れたる美事の一斑として記念すべきところのものなり。今日幸にして君の生前に集められたる古錢八十七文の存するあり、彼の肴屋に渡したる錢緡中の古錢も亦この中にあるや明らかなり。余が年來身邊を離さずして、少年遊學中もこの錢ばかりは大切に携帯したるところのものなれども、汝等も齡漸く長じて、數年

の後には社會の一員となるべきものなれば、今この錢を分ち與へ、その一分は汝等二男四女の間配分して今後修身處世の記念品となし、残る一分は余が座右に留めて、修身の寶鑑とすること舊の如くすべし。

福澤の家はもと小祿の貧士族にして餘財あることなし。余が相續のとき家に在るものは、唯數百冊の漢書と僅々の書畫、刀劍とのみなりしが、是等の品も余が勤學中に賣盡くして學資に供したれば、汝等に頒つべき先代の遺物としては殆ど一物もなし。たとひこれあるも、今日金を出せば買ひ得べきものに過ぎざれば、これを得ずとも遺憾にあらず。されど獨りこの古錢に至つては、千金を投ずるも買ふべからざる寶物にして、先人の餘光の存するものなり。今余と汝等と共にこの餘光を蒙る。遺物大

北畠親房

吉野朝の忠臣
大納言
從一位准三后
正平九年(1344)
卒
年六十三
贈正一位
又の年

延元三年(1316)
正月顯家は鎌倉
出發東海道から
美濃・伊勢・伊
賀を経て奈良に
入つた

顯家

親房の長子
延元三年(1316)
戰歿
年二十一
贈右大臣從一位
親王
義良親王
後御即位あつて
後村上天皇と申
し奉る

なりといふべし。謹んでこの寶物を失ふなかれ。謹んでこの寶物の精神を忘るゝなかれ。汝等子あらばこれを子に傳へよ。孫あらば孫に傳へしめよ。世々子孫福澤の血統、汝々勉強して自立自活能く家を治むべきは言ふまでもなきことながら、萬一不幸にして財に貧なるの憂あるも、文明獨立の大義を忘れ節を屈して心飢うるの貧に沈むなかれ。

明治十一年二月五日

諭 吉

二五 秋 霧

北畠親房

又の年戊寅の春二月、鎮守府大將軍顯家卿、また親王を先だて申し、かさねて打上る。海道の國々悉く平ぎぬ。伊勢伊賀を経て大和に入り、奈良の京になむ着きにける。それより處々の合戦、

男山

京都府(山城國)
石清水八幡宮の
鎮座する山

義貞
新田義貞

陸奥の皇子

義良親王
顯信
顯家の弟

陸奥國

あまた、び互に勝負侍りしに、同じき五月、和泉の國にての戦に、時や到らざりけむ、忠孝の道こゝにて極まりぬ。苔の下にも埋れぬものとは、たゞ徒に名をのみぞ留めてし。心憂き世にも侍るかな。官軍なほ心を勵まして、男山に陣を取りて暫く合戦ありしかど、朝敵忍びて社壇を焼拂ひしより、事成らずして引退く。北國に在りし義貞も度々召されしかど上りあへず、させる事なくて空しくさへなりぬと聞えしかば、いふばかりなし。さてしも止むべきならずとて、陸奥の皇子又東へ向はしめたまふべき定めあり。左少將顯信朝臣中將に轉じ、從三位に敘せられ、陸奥介鎮守府將軍を兼ねて遣はさる。東國の官軍悉く彼の節度に従ふべき由を仰せらる。親王は儲の君に立たせ給ふべき旨申し聞かせたまひ、道のほども忝かるべし、國にてはあらは

異母の御兄
尊良親王は越前
金ヶ崎で御自害
護良親王は足利
直義に弑せられ
給ひ宗良親王だ
け御在世

伊豆の崎
石廊崎
伊豆半島の最南
端

内の海
霞浦

させたまへどなむ申されし。異母の御兄もあまたまししくき、
同母の御兄も前東宮恆良親王、成良親王まししくしに、かく定ま
り給ひぬるも、天命なれば忝し。
七月の末つ方、伊勢に越えさせ給ひて、神宮にこの由を啓して御
船の儀ひし、九月の初、纜を解かれしに、十日頃の事にや、上總の地
近くより、空の氣色おどろしく、海上荒くなりしかば、又伊豆
の崎といふ方に漂はれ侍りしに、いと々波風夥しくなりて、數多
の船行方知らず侍りけるに、皇子の御船は障りなく伊勢の海に
着かせ給ふ。顯信朝臣は元より御船に候ひけり。同じ風のま
ざれに、東を指して、常陸の國なる内の海に着きたる船侍りき。
方々に漂ひし中に、この二つの船、同じ風にて東西に吹分けらる。
末の世には珍らかなる例にぞ侍るべき。儲の君に定まらせ給

冬
實は八月二十八
日

舊都
京都
光明院おはす

ぬるが内
ぬるがうちに見
るをのみやは夢
といはむはかな
き世をも現とは
見ず(壬生忠実)

ひて、例なき鄙の御住居も如何と覺えしに、皇大神のとゞめ申さ
しめ給ひけるなるべし。後に吉野に入らせまししくて、御目の
前にて天位を嗣がせ給ひしかば、いと々思ひ合はせられて尊く
も侍るかな。又常陸はもとより志す方なれば、御志ある輩相計
らひて、義兵こはくなりぬ。
さても舊都には、戊寅の年の冬改元して曆應とぞいひける。吉
野の宮にはもとの延元の號なれば、國々も思ひくくの號なり。
唐土にはかゝる例多けれど、この國には例なし。されど四年に
もなりぬるにや。大日本島根は固よりの皇都なり、内侍所、神璽
も吉野におはしませば、いづくか都にあらざるべき。
さても八月の十日餘り六日にや、秋霧に冒されさせ給ひて、かく
れましましぬとぞ聞えし。ぬるがうちなる夢の世は、今に始め

仲尼

孔子は春秋を筆削して筆を獲麟に絶つた
仲尼は孔子の事

ぬ習とは知りながら、かずく目の前なる心地して、老の涙も乾

きあへねば、筆の跡さへ滞りぬ。昔

仲尼は獲麟に筆を絶つとあれば、こ

こにて止りたけれど、神皇正統の邪

なるまじきことわりを申し述べて、

案意の末をもあらはさまほしくて、

強ひて記しつけ侍るなり。

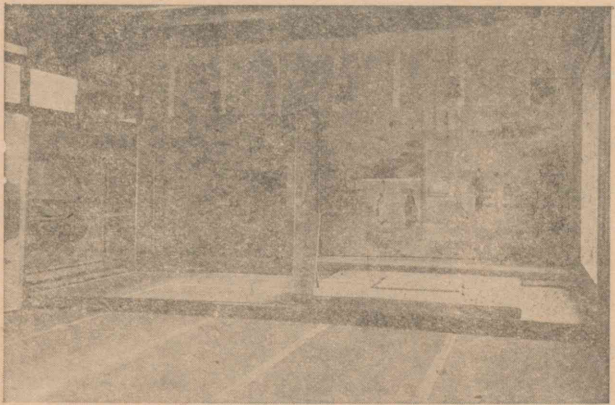
かねて時をも悟らしめたまひける

にや、前の夜より親王をば左大臣の

第へ移し奉られて、三種の神器を傳

へ申さる。後の號をば仰のまゝに

て後醍醐天皇と申す。天下を治めたまふこと二十一年、五十二



讀聖歷皇朝野言 聖神水宮

左大臣
關白左大臣藤原
經忠

諸皇子

廣坂・忍熊の諸
皇子

胎中天皇

應神天皇

御怨念

玉骨はたとひ南
山の昔に埋ると
も魂魄は常に北
關の天を望まん
と思ふ若し命を
背き義を輕んぜ
ば君も繼體の君
に非ず臣も忠烈
の臣に非じとて
委細に綸旨を殘
されて左の御手
に法華經の五の
卷を持たせ給ひ
右の御手に御劍
を按じて八月十
六日の丑の刻に
遂に崩御なり
けり(太平記)
今の帝
後村上天皇

歳おましましき。

昔、仲哀天皇熊襲を攻めさせたまひし時、行宮にて神さりまし
しき。されど神功皇后程なく三韓を平げ、諸皇子の亂を鎮めら

れて、胎中天皇の御代に定まりき。この君聖運ましまししかば、

百七十餘年中絶えにし一統の天下を知らせ給ひて、御目の前に

て日嗣を定めさせたまひぬ。功もなく徳もなき盗人世をとり

て、四年餘りが程宸襟を惱まし、御世を過ぎさせたまひぬれば、御怨

念の末空しく侍りなむや。今の帝亦天照大神よりこの方の正

統を受けましましぬれば、この御光に争ひ奉る者やはあるべき。

なか／＼かくて鎮まるべき時の運とぞ覺え侍る。(神皇正統記)

二六 月の夜さむ

題しらず

後醍醐天皇御製

忘れめや寄るべもなみの荒磯を御船のうへにとめし心は

元弘三年

後醍醐天皇の御

代(九九)

源長年

名和長年

船上山

鳥取縣(伯耆國)

東伯郡に峙つ山

この御製は元弘三年隱岐國より忍びて出でさせ

給ひける時源長年御迎へに参りて船上山といふ

處へなし奉りける程の忠例なかりし事など記し

おかせましましけるものの奥に書添へさせ給ひ

けるとぞ

元弘三年九月十三日三首の歌講ぜられし時月前擣

衣といふことを

聞きわびぬはつき長月ながき夜の月の夜さむにころも

つ聲

百首の歌よませ給ひて前大納言爲定の許へ遣はさ

爲定

藤原氏

歌人

新千載集の撰者

れける中に

後村上天皇御製

あはれはや浪をさまりて和歌の浦にみがける玉をひろふ

世もがな

吉野の行宮にて人々に千首の歌めされし序に山花

といふ事をよませ給ひける 長慶天皇御製

わがやどとたのまずながら吉野山花になれぬる春もいく

とせ

土佐國にて百首の歌よみ侍りける中に海邊霞を

中務卿尊良親王

春がすみかすむなみぢはへだつともたよりしらせよ八重

の湖風

東の方に久しく侍りて只管武士の道にのみたづさ

土佐國

元弘二年(九九)

北條氏の爲に土

佐國橋多に流さ

れ給ひ翌年御歸

京

尊良親王

後醍醐天皇の皇

子

延元二年(九九)

越前金ヶ崎城に

御自害

宗良親王

後醍醐天皇の皇子
新葉集の撰者

籠手指原

埼玉縣(武藏國)入間郡所澤の西四軒

新待賢門院

後醍醐天皇の中宮藤原康子

はりつゝ、征東將軍の宣旨など下されしも思の外なるやうに覺えてよみ侍りし 中務卿宗良親王
おもひきや手もふれざりし梓弓おきふし我が身なれむものとは

同じ頃武藏國へ打越えて籠手指原といふ處におりゐて手分などし侍りし時いさみあるべきよしつはものどもに仰せ侍りしついでに思ひつゞけ侍りし君のため世のためなにか惜しからむ捨ててかひある命なりせば

後醍醐天皇かくれさせ給ひて又の年の春花を見てよませ給ひける 新待賢門院

時しらぬなげきのもとに如何にしてかはらぬ色に花の咲

くらむ

正平七年
後村上天皇の御代(1333)
塔尾の御陵
後醍醐天皇の御陵

祥子内親王

後醍醐天皇の皇女
御母は藤原康子

咲く花の散る別れにはあはじとてまだしきほどをたづねてぞ見る

元弘元年八月俄に比叡山に行幸なりぬとて彼の山に登りたりけるに湖上の有明ことにおもしろく侍りければ

おもふことなくてぞ見ましほのくゝと有明の月の志賀のうら波

文貞公

(新葉和歌集)

文貞公
藤原師賢
吉野朝の忠臣
大納言
延元二年(1327)卒
年三十二

徳富蘇峯

名は猪一郎

新聞記者

貴族院議員

帝國學士院會員

帝國藝術院會員

文久三年(一五三)

肥後國(熊本縣)

生

二七 當今の憂

徳富蘇峯

日本帝國の運命は、日本國民の自力に依りて支持せられ、繼續せられ、開展せらる。吾人が自力主義を主張するは、畢竟我自ら我を恃む外に方便も手段もあらざればなり。よし千百の方便、手段ありとするも、その自力主義踐行の後に於て、始めてその効用を見るべければなり。

然りと雖も、吾人の所謂自力主義は、決して自滿主義にあらず、自足主義にあらず。又固より鎖國主義、排外主義にあらず。吾人は我が短を補ふべく、世界の總べての長を採らざるべからず。吾人は飽くまで籠城割據の風を破りて、世界と步趨を一にせざるべからず。しかもこれ唯内に自ら主持する所ありて、而して

後、外に向つてこれを求むべきのみ。

吾人は我が國民が精神的に獨立し、而して後、世界的に協調せんことを望む。精神的の獨立とは何ぞや。日本國民は日本國民として、その獨得の立脚地に於て内外一切の經綸を定むることこれなり。東洋の獨逸にあらず、東洋の英米にあらず、日本は東洋の日本としてなり、日本の日本としてなり。即ち我自ら我が固有の歴史的系統に則り、我自ら我が國民的見地に依りて裁斷を下すにあるのみ。此の如く、内既に主持する所あり、乃ち外に向つてその益を求む、必ずしも英米と言はず、必ずしも獨佛と言はず、世界の長は皆採りて以て我が有となすべし。復何をか顧慮し、何をか遲疑せんや。

惟ふに、我が國當今の憂は、第一、國民の情氣滿々たることなり。

別言すれば、國民猛志を鎖磨し、小成に安んずるにあり。曰く、日本は既に五大國の一に位せり、曰く、日本は既に東洋の盟主たり、曰く、日本は既に富强なりと。而して更に磨礪自彊し、この國運を進一轉せしむることを閑却しつゝあるなり。

第二、世界の大局を根本的に誤解したるにあり。曰く、世界は泰平なり、今後は戦争らしき戦争は絶無なるべし、國際的葛藤は聯盟によりて自動的に安排せらるべしと。彼等はその待つあるを待まず、その來るなきを待み、その待むべきを待まず、その待むべからざるを待めり。

第三、我が日本帝國は世界に孤立せり。孤立といはんよりも、多くの者より排斥せられつゝあるなり。これ必ずしも日本國民の罪とのみいふべからず。しかもその原因はいづくにあるに

もせよ、事實は正しくかくの如し。然るに我が國民は、此の如き不愉快なる事實を正視し、認識し、これに處する所以の道を講ぜざるは何ぞや。

第四、我が國民は、物質的に驕慢となり、精神的に萎縮せり。退いて自力の足らざるを慚ぢ、自國の缺陷を補ふことを怠めず、進んで世界に向つて自國の真相を闡明し、世界の誤解を正すことを努めず、たゞその日暮しに一時の苟安を偷取しつゝあるは何ぞや。

第五、一寸の蟲にも五分の魂あり。如何に世界の迫害を被るとも、我が國民にして自ら道義的大自信あらば、それ何をか懼れ、何をか憚らんや。今日の憂は、日本帝國が世界的迫害の中心たるにあらずして、日本國民の道義的自信力の失墜にあり。蓋し吾

人の所謂自力主義とは、内に國民の道義的自信力を扶植し、先づ自ら不敗の地位を占め、而して後、徐に外に向つて我が志を行ふにあるなり。

かくの如くして世界と協調を保つべく、かくの如くして東洋の盟主たるべく、かくの如くしてアングロサクソン民族と角逐して世界の文明に貢献し、大和民族の天職を完うするを得べきのみ。今日の如く我が國民自ら信ぜずして他を信じ、自ら恃まずして他を頼み、放恣怠慢、強ひて自ら欺いて眼前を糊塗し去り、毫も自ら反省するところなくんば、我が帝國は精神的に死亡するに至るべし。世界の歴史は進歩の歴史なり、改善の歴史なり、向上の歴史なり。吾人は如何に一方に痛楚號泣するが如き現象を見るとも、他方には光明と平和との到來を疑ふ能はざるなり。

アングロサクソン
英人の祖先たる種族

但しこれを果さんが爲には非常なる危険、非常なる艱難、非常なる苦痛を経ざるべからず。今や吾人は正にこの一大試煉の時期に遭遇せり。随つて吾人が當面の問題は、我が日本國民が果してこれに及第するか否かを決するに在るなり。

嘉永・安政の際、我が日本は全く内憂外患の危機に擠されたりき。しかも我が先人は種々の失敗過誤を累ねたるに拘らず、遂にこれを排除して維新中興の新局面を打開せり。願ふに明治半百年に互れる國運の増進は、固より明治天皇聖徳の致す所なりと雖も、亦嘉永・安政より元治・慶應に至る國歩の艱難によりてこれを培養したるものといはざるを得ず。人は艱難に活きて安逸に死す。國も亦然り。獨伊諸國の現時に於て再生復活しつゝある所以、亦固より大戦の大試煉を経來りたるが爲のみ。吾人

嘉永

孝明天皇の御代

(一八二〇—一八五四)

安政

孝明天皇の御代

(一八五四—一八六〇)

元治

孝明天皇の御代

(一八六〇—一八六四)

慶應

孝明天皇の御代

(一八六四—一八六八)

はこれを我が國の過去に徴し、これを獨伊諸國の現在に徴し、我が帝國の前途に横たはる無数の危殆困難を豫想して、毫も自ら失望落膽せず。若し然るべき理由あらば、それは無数の危殆困難そのものにあらず、寧ろこれに氣附かず、空々寂々、悠々緩々として、苟且偷安を事とする我が國民的精神の潰破これのみ。我が國民が自ら冒進するにせよ、はた回避するにせよ、何れにしても我が國民的一大試煉の時機は既に到來しつゝあるなり。この上の問題は果して國民的一大決心、一大努力、一大奮闘もてこれに打克つを得べきかにあり。吾人は先づ我が國民が國運の消長興廢の十字街頭に立つことを自覺せんことを望む。次にこの國家的一大危機に向つて勇進し、潔くこの一大試煉に及第せんことを望む。しかもこれ決して容易の業にあらざるな

り。吾人日本國民は何れも國家的に大死一番して、而して後その再生復活を期せざるべからず。如何に國家の難局を逃避すとも、來るべきものは遂に來らざるを得ず。吾人は寧ろ今日に於てこれを覺悟し、鐵石の心腸もてこれに當る決心なかるべからざるなり。輕々しくその趾を擧ぐる勿れ、漫にその腕を扼する勿れ。忍ぶべきは忍べ、耐ふべきは耐へよ。只我が大和民族たらんものは、世界公論の容す所に據りて天下の大道を行ひ、國際共通の正義を旨とし、以て我が所信を遂げよ。吾人は我が力を持つとともに、我が正義を持つ。かくの如くして與國の我を扶くるあらば、與國と共にすべし。若し與國なくんば、我自ら往くべき道を往かんのみ。吾人は決して外患を恐れざるなり。若し眞に畏るべきものあ

らば、その内憂にあり。内憂の中殊に畏るべきは國民的志趣の銷磨にあり。知らず、我が國民は大死一番以て自ら新生命を贏ち得る覺悟あるか。活裡死あり、死中活あり。生を欲する者は死、死を敢へてするものは生。國家の前途を解決すべき秘機は、只この死生の二字中にあり。(大戰後の世界と日本)

二八 一君萬民

永田秀次郎

我が大日本帝國の國體が君主國體であつて、主權者の天皇にましますことは、大日本帝國憲法の明らかに示すところである。これ實に我が建國以來の事實であつて、憲法は唯この事實を法文となしたるに過ぎないのである。

永田秀次郎
政治家
元拓務大臣
貴族院議員
拓殖大學長
帝國教育會長
明治九年(三三〇)
兵庫縣生
憲法
大日本帝國へ萬

世一系ノ天皇之ヲ統治ス(大日本帝國憲法第一條)
瓊杵尊
天照大神の御孫
子
天照大神の御孫

豐葦原
豐葦原、千五百秋之瑞穗國、是吾子孫可レ王之地、宜爾皇孫就而治焉。行矣。實神之隆。
與三天壤一無窮者矣。(日本書紀神代卷)

謹んで我が建國の古を按ずるに、そのかみ伊弉諾伊弉册の二神は天瓊矛を以て滄溟を探り、先づ自凝島を造らせられ、次いで大八洲を造らせられた。降つて天孫降臨の際、天照大神は、天孫瓊杵尊に

豐葦原の千五百秋の瑞穗國は、これ吾が子孫の王たるべき地なり。宜しく爾皇孫就てまして治らせ、行くませ。實祚の隆えまさんこと、當に天壤と窮まり無かるべし。

といふ神勅を賜はつた。建國の由來は此の如く遼遠にして、此の如く神祕である。この神勅たるや、この上なく崇高であり、又この上なく意味深きものである。この神勅こそは實に我が大和民族の理想の現れであり、希望の現れであり、又情緒の現れである。或は思慮淺薄なる人たちの中には、此の如き事實は有り

得べからざることであらうなどと思ふものがあるかも知れない。併しながら、神話はどこまでも神話である。神話の神話たる所以は末世末法の穢れた者の頭脳では判断のつかぬ所に存する。故に我が建國の神話に對しては、有史以前の神祕なる言繼ぎの下に國が創められ、臣民の記憶せざる古き時代より皇室を宗親として發達したものである。と理會すれば宜しいのである。

我が建國は此の如くに宏遠である。爾來百二十餘代の列聖は、皆徳を樹てたまふこと深厚にましまし、これに臣事する衆庶億兆も亦心を一にして世々厥の美を濟した。かく君臣上下相倚るの聲きは、實に我が國體の精華である。

我々大和民族は、我が皇室を以て民族の中心なり、宗親なりと考へてゐる。天孫降臨の後、益々繁昌して一大民族をなしたものと考へてゐる。

義は即ち君臣にして
雄略天皇の御詔

我々は祖先以來此の如くに教へられ、又此の如くに信じ來つた。この信念が凝結して、義は即ち君臣にして情は猶父子のごとし。といふ美風を形成したのである。この情は猶父子のごとし。といふことは、單に皇室の御方面より此の如く思し召されるのみでなく、臣民の方面よりも亦此の如くに思つてゐるのである。

私は曩に明治神宮鎮座祭に於ける衆庶の赤誠を目睹し、又最近皇太子殿下御降誕の際に於ける二重橋前の光景に直面して、我が臣民の皇室に對し奉る忠誠の至情の益々加はりつゝあることを知り、衷心の愉悅を禁ずることが出来なかつた。しかしなが

皇太子殿下御降誕

昭和八年十二月二十三日

ら、皇室が我々大和民族の宗親であるといふ點についても、種々心得ておかねばならぬことがある。それは、日本の民族は果して單一なる民族なりや否やといふことである。私は嘗てマクゴーバンといふ人の書いた「近代の日本」といふ本を見たが、その本には、

日本人は彼等が想像してゐるやうな單純な民族ではない。少くとも五種の民族の混合である。
第一、熊襲民族、第二、アイヌ民族、第



皇太子殿下御降臨直後國民の呼聲

武甕槌命
葦原中國平定の
功神
官幣大社鹿島神
宮の祭神
經津主命
葦原中國平定の
功神
官幣大社香取神
宮の祭神
大國主命
神代の昔出雲を
治め給うた神
官幣大社出雲大
社の祭神

三、出雲民族、第四、支那民族、第五、大和民族である。とある。かう言はれてみると、成程我々臣民は澤山な民族の集合かも知れぬ。我々は歴史に於て熊襲を知つてゐる。アイヌは今日でも北海道の一地方に僅少ながら見られる。皇祖天照大神が武甕槌命及び經津主命をして出雲の大國主命に歸順を説かしめ給うた神代史に依つて見ても、天孫以前に出雲民族のあつたことが首肯される。又朝鮮や支那の民族の移住も有り得ることである。此の如くに考へて見ると、大和民族は一族であつて、その宗親は皇室にましますといふことは根據を失ふことになりはせぬかといふ疑問が起る。が、この疑問に對して、私の斷案は極めて直截簡明である。凡そ一國の國民精神は、その國民の中心思想である。而して我々が

皇室を宗親と崇め奉り、我が皇室を中心として戴き奉る精神は、實に我々の國民精神である。この國民精神は、固より事實と歴史とより出發した精神に相違ないが、決して異民族を包容し得ない精神ではない、否、我々と合體して同一の生活をなす凡ての者を見事に同化し融合してしまふ精神である。論より證據、我大和民族は立派に他の民族を歸服せしめ、三千年來言語も風俗も習慣も全く同一ならしめた。試に日本人の一人を捉へて、「君は熊襲民族なりや、出雲民族なりや」と問うたら、その者は啞然として何の意味たるかを解することが出來ぬであらう。これ即ち幾つかの民族が完全に我が大和民族に同化した證據である。これら幾つかの民族は、既に完全に同化して一民族となり、我が大和民族の宗親を皇室として信仰し來つてゐるのである。

次に皇室の萬世一系にましますことについて述べよう。我が國の皇位繼承が天孫降臨の神勅によつて萬世一系たることは日月の如く明らかで、何の疑もない萬民具瞻の事實である。此の事實は固より萬國無比であつて、我が民族の無上の誇とする所である。これは決して偶然の事實ではない、又單なる形式上の事ではない。實にかくあらざるべからざる理由の下に生じた必然の事實である、又偉大なる内容を有するが爲に生じた當然の結果である。偉大なる内容とは何であるか。いふまでもなく君臣上下の結合である。即ち皇祖・皇宗の御盛徳と臣民の忠孝義勇とが君臣上下結合の美果を結んだのである。我々が萬世一系の事實を讚美し謳歌する所以は、全くこれに基づくの

西行法師

俗名佐藤義清
鎌倉時代の歌僧
建久元年(一〇九〇)
寂
年七十五

である。かの西行法師は物慾に恬淡なる出家である。將軍頼朝から賜はつた銀猫を門前の子供に與へて飄然と立去つたといふ風の沙門である。しかも、なほ伊勢皇大神宮に詣でて、何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるゝと詠じた。我々の皇大神宮に對し奉る感情は、正しく西行の歌の如くである。我々の萬世一系の皇室に對し奉る感情も、亦正しくこれと同じである。我々は我が皇室に對し奉つて、無上の敬虔を感じ、無上の崇高を感じ、又無上の神聖を感ずるのである。

私は更に一步を進めて、皇室と國民生活との關係を述べようと思ふ。我が國の人心はとかく感傷的で、熱狂し易い。随つてまま冷靜堅實の判断をあやまり、常軌を逸するおそれがないでも

板垣伯

伯爵板垣退助
明治維新の功臣
舊土佐藩士
舊自由黨總裁
大正八年卒
年八十二

ない。かゝる場合に、若しこれを緩和すべき道がなかつたならば、到底この感傷的な民心を安定させることは出来ない。而して皇室は常に高く政争圏外に立たせられ、不偏不黨、一視同仁、以て民心を有形無形に統一したまふのである。余は先年次のやうな話を先輩に聽いた、板垣伯が嘗て野に下つて自由民権を高唱し、遊説のため岐阜に赴いた時、一壯漢が突如現れ出て、これを刺した。その刹那、板垣死すとも自由は死せずと喝破された伯の一語は、實に伯の一生を飾るものである。その頃の官憲は、伯の運動を何と考へたものか、遭難の際、伯に對する取扱は頗る冷淡であつた。然るに明治天皇には、畏くも直に勅使をお下しになつて、伯を慰問せしめ給うた。その時、伯は肅然として床上にかしこまり、聖恩、臣退助に及ぶといつて、覺えず感涙に咽んだと

いふ。余はこの一事を聞いて、非常に感動した。嗚呼、この一事が萬事を物語つてゐる。我が國民は政争に熱狂するの餘り、往往反對黨を視ること國賊を視るが如きものがある。しかし、いかに熱狂してゐても、「皇室」といふ一語を耳にすると、さながら電氣に打たれたやうになつて、靜まり還るのである。そして自他共に敬虔忠誠なる陛下の赤子に還つてくるのである。我が國民性は、正に此の如くなのである。

凡そ一國の政治は、社會の形體を支配するけれども、精神を支配しない、道理を伸べるけれども、情緒を盡くさない。人間は感情の動物である以上、道理や形式ばかりでは乾燥無味となつて、社會の融和協調を保つことが出来ぬ。この點に於て、皇室は國民

の實生活上に絶大な寄與をなされてゐると思ふ。例へば、或種の犯罪に對して、大赦特赦の恩典を與へ給ふが如き、各種の慈善事業感化事業を勸奨せさせ給ふが如き、各種の救濟事業に對する御補助の如き、博愛の趣旨に基づく赤十字事業の御奨励の如き、水火震災に對する御救恤の如き、はた各種の社會的事業に皇族の御方々が總裁として臨ませ給ふが如き、一として我が皇室が我が國民生活の實益に寄與したまふ事實を證明しないものはない。又我が皇室は、風教上に於ても、常に臣民の善行篤志を嘉賞せさせたまふのみならず、屢、勅語、詔書などをお下しになつて國民を指導せさせ給ひ、國民がその歸向を誤ることのないやう努めていらせられる。將來勞働問題を始め、種々の重要な社會問題の起るべきに際し、この至仁至慈なる皇室を奉戴してゐ

ることは、我が國民をして如何に心強さと安慰とを感ぜしめることであらう。

更に私は文化生活の上より我が皇室を仰ぎ奉るのである。歴代の皇室が常に教育、文學、美術、技藝等に對して保護獎勵を加へさせ給うたことは、茲に縷述するを要しない。明治維新以後に於ても、我が皇室は教育に對して殊に御留意遊ばされ、萬乘の尊を以て、屢、大學その他の學校に行幸あらせられた。又毎年御歌會始には勅題を賜はつて選歌の事あり、御講書始には特に碩學、



宮 神 大 皇

鴻儒をして和漢洋の典籍を進講せしめられる。その他、美術學藝に對しても、常に特別の保護獎勵を加へさせられてゐる。蓋し我が皇室は榮譽の源泉である。國民文化の向上といふ高尚なる使命を有する學者、教育家、藝術家等は必ずしも社會的に功名富貴を得られるものではない、又これを期待すべきものでもない。これを精神的に勸奨激勵するの途は、皇室の御保護と御嘉賞とをおいて他に何ものも無いのである。

最後に私は重ねて申したい。私どもは皇室を讚美する、絶對に讚美する、無條件に讚美する。何となれば、これ三千年來私どもの祖先より先天的に私どもに傳來せる國民的信仰であるからである。私どもの情熱は決して議會の多數決とか、憲法の正條

とかいふが如き理論と法規とのみを以て満足することは出来ない。是非とも情を盡くし理を盡くした温い或物を要求する。私ども九千萬同胞の腦裏を支配する情緒は、實に天壤と共に窮まりなき、至仁至慈なる我が皇室の大傘下にあらずんば、これを結合することが出来ないのである。(日本精神講座)

中國文教科書 卷五 終

(略名) 光風吉田國語

昭和十八年七月二十六日
昭和十七年八月二十三日
昭和十六年九月十四日
昭和十五年十月二十五日
昭和十四年十一月十六日
昭和十三年十二月七日
昭和十二年一月十七日
昭和十一年二月十八日
昭和十年三月二十七日
昭和九年四月二十七日
昭和八年五月二十七日
昭和七年六月二十七日
昭和六年七月二十七日
昭和五年八月二十七日
昭和四年九月二十七日
昭和三年十月二十七日
昭和二年十一月二十七日
昭和十一年二月十八日
昭和十年三月二十七日
昭和九年四月二十七日
昭和八年五月二十七日
昭和七年六月二十七日
昭和六年七月二十七日
昭和五年八月二十七日
昭和四年九月二十七日
昭和三年十月二十七日
昭和二年十一月二十七日
昭和十一年二月十八日
昭和十年三月二十七日
昭和九年四月二十七日
昭和八年五月二十七日
昭和七年六月二十七日
昭和六年七月二十七日
昭和五年八月二十七日
昭和四年九月二十七日
昭和三年十月二十七日
昭和二年十一月二十七日

中國文教科書 全十册
定價各金六拾錢

編者 吉田 彌平
補訂者 石井 庄司
發行者 東京神田區岩本町三番地
中等學校教科書株式會社
代表者 山本 慶治
印刷者 (東京) 大日本印刷株式會社
石村 勳
東京都牛込區市谷加賀町一丁目十二番地



發行所 東京都神田區岩本町三番地
中等學校教科書株式會社
日本出版會會員番號 一一七五二二

配給元 日本出版配給株式會社
東京都神田區淡路町二ノ九

